

防災教育推進連絡協議会
成果報告シンポジウム 報告書

平成 27 年度 文部科学省「リスクコミュニケーションのモデル形成事業」成果報告

平成 29 年 3 月

群馬大学 広域首都圏防災研究センター

片田 敏孝 編

防災教育推進連絡協議会 成果報告シンポジウム 報告書の発行にあたって

東日本大震災の発生以後、小中学校における防災教育の重要性が再認識され、全国各地で様々な活動が実施されるようになっていきます。その中には、「防災に関する知識を得た」「防災に対する意識が高まった」などといった防災上の教育効果だけでなく、防災を通じて、地域コミュニティや地域住民とのつながりを重視した教育活動を実践することにより、「他者の命を大切にする」「地域を愛する」といった防災以外の面での教育効果があることも報告されています。

このような背景のもと、防災教育を「防災を教える教育」だけでなく、「防災を通じた教育」という観点から捉え直し、特に“教育効果”と“地域と連携した教育実践”の着目し、今後求められる防災教育とはどうあるべきか、それを実践するために教員はどうあるべきかを議論する場として、防災教育推進連絡協議会を立ち上げました。本協議会は、すでに様々な防災教育を実践されている地域の皆さんにご参加いただき、各地の実践報告などをもとに上記課題について議論を深めていくことを通じて、小中学校における防災教育を推進し、それを継続する仕組みを構築することにより、地域の災害文化の形成およびその定着に寄与することを目的としています。

防災教育推進連絡協議会は、平成 26 年 12 月に岩手県釜石市において第 1 回を開催させていただいたのに引き続き、平成 27 年 8 月には和歌山県田辺市において第 2 回を、同 12 月には高知県黒潮町において第 3 回を、そして、平成 28 年 8 月に都内において第 4 回を開催させていただきました。本協議会では、各地での実践を踏まえて、「防災教育に求められるコミュニケーション力」、「地域と連携した防災教育」を主なテーマとして、参加者間で共通理解をはかってきました。

そして、これまでの議論を踏まえ、平成 28 年 8 月に成果報告シンポジウムを開催いたしました。本協議会の開催を通じて得られた成果の報告だけでなく、本協議会参加者によるパネルディスカッションを行い、今後の防災教育の在り方について討論しました。本書は、これら内容を報告書としてとりまとめたものです。本書が防災教育を実践されているみなさんの一助になれば幸いです。

平成 29 年 3 月

群馬大学大学院 教授 片田 敏孝

目次

1. 開会挨拶	1
2. 本プロジェクトのねらいと活動実績・成果.....	3
3. パネルディスカッション.....	5
(1) パネリストからの話題提供	5
(2) 防災教育の効果	23
(3) 防災教育を通じて果たしたい願い	28
4. 閉会挨拶	35

【付録】 当日配布資料

1. 開会挨拶

片田 敏孝 (群馬大学大学院 教授)

皆さん、おはようございます。昨日、第4回の防災教育推進連絡協議会を開催いたしました。この会は、第1回を釜石で、第2回を田辺、第3回を黒潮で開催させていただき、第4回目は東京にお集まり頂き、3年間の成果について議論させて頂きました。

思い起こしますと、たった4回なんですけども、当初の議論から、随分トーンが変わってきたことを実感しております。第1回の頃は、釜石に行きましたので、被災地を目の当たりにして、皆が動揺したんだろうと思います。ちょうどあの時、南海トラフの巨大津波想定が出て、それぞれの地域でどう対応したらいいのか。先生方の目の前には子どもたちがいて、子どもたちにどう生きる力を与えたらいいのか。暗中模索の中で当時の防災教育は、おそらく『逃げる逃げる教育』の一辺倒だった。また、そうならざるを得なかったと思います。「とにかく、しっかり逃げられるようにする」、「そのためにはどうしたらよいか」、そればかりを考えていました。

しかし、生きのびるために精一杯やりながら、子どもたちと向かい合っているうちに、少しずつの先生方の思いに変化が生じてきたように思います。「ひょっとしたら東日本大震災のようなことがこの町で起こるかもしれない。でも、先生は皆に死んで欲しくないんだ。津波なんかで死んで欲しくないんだ。災害なんかで命を落としちゃならないんだ。」という先生方の思いを子どもたちに伝える。当時は「形式的で通り一辺」と言っただけなんですけども、さほど工夫もない、ただただ一生懸命やる防災教育だったと思うんです。それでも子どもたちに伝わったものはあったように思うんですね。

子どもたちは、「自分の命は自分で守る」ことは当然のこととして、「自分は先生方にも大事に思われているんだ」ということに気付く。そして、ふと考えれば、「お父さんやお母さんは、自分の命をお父さんお母さん自身の命以上に大事に思っていてくれる」ことにも気づき、家庭を見つめ直す。そして、



片田 敏孝 (群馬大学大学院 教授)

皆で議論していく中で、『地域共通の敵である津波』に自分だけで向かい合っているんじゃない。地域全体でそれに向かい合っているんだ」ということに気付いた時に、自分達だけでなく、おじいちゃんやおばあちゃん、小さな子どものことを気遣い、地域を思う心を育む。当初、恐れおののいていた防災教育の状況から、時間の経過と共に、命を守るという事、災害に地域が向かい合う事など、子どもたちの思いも少しずつ広がっていったと思います。

そして、防災教育をやっておられる先生方の思いの中にも少しずつ変化が生じてきたと思います。最初は焦っていた。何とかしたいと思っていた。しかし、子どもたちが取組を通じて、どんどん変わっていく。地域の事を思うようになり、一生懸命取り組んでいく中で、地域の方々の反応があって、自分が認められていく。今までは対社会に対して無力感しかなかった子どもたち。「所詮、僕はまだ子どもだ」としか思っていなかった子どもたちが、自分たちの取組によって地域が動き始める。それを目の当たりにして、凄く自信を持ち、そして、自己有用感を持つ。大きな自信を得ることができたと思います。

そんな中で嬉しい報告もいくつかありました。もちろん、防災教育をやれば、必ずそうなるという事ではないのですが、例えば、自分の命だけではなく、他者の命のこともちゃんと考えられるようになっていく中で、いじめみたいな問題がなくなっていく。自分の役割や友達との関係を見つめ直す機会になったということでしょう。また、今を一生懸命生きることの大切さを実感し、「今、僕は学ぶときなんだ」に気付いたら、やはり学ぶようになる。風が吹けば

桶屋が儲かるみたいな話に聞こえるかもしれませんが、学力の向上すら見られるようになった。非常に幅広い教育効果を僕らは確認することができるまでに至りました。

今日、成果報告のシンポジウムということで、ひとまずの取りまとめをするときを迎えました。この間を振り返って、最初の思いから今日に至るまでの我々の中での防災教育の位置付けの変化を再確認するなかで、これからを見据えていきたいと思っています。

昨日の第4回では、「これからは『防災教育』という言葉を使いたくないよね」という議論もありました。『防災教育』と言っただけで、それイコール『逃げろ逃げろ教育』みたいに、災害に対して向かい合うテクニカルな **how to** に聞こえてしまう。そうじゃない。防災教育には非常に幅広い教育効果が秘められている。「子どもたちの中にどういふ変化をもたらしているのか」を僕らは感触としては掴んでいるんだけど、まだそれを定型化できていない。それを単に防災教育ではなくて、日本の教育という部分にどう反映していったらいいのかという点についての議論がまだ十分できていないんじゃないか。そんなところまで議論してきました。また『生き方科』という教科科目の提案の話も出てまいりました。我々の議論もある一定の成熟をみてきたのかな、次を見据えるだけの条件が整ってきたのかなと思っています。

今日のシンポジウムをもって、文科省の支援のもとでの連絡協議会のプロジェクトは中締めを閉めようと思います。ここに参加されている先生方の中で、独自の交流も既にスタートしております。大変結構なことです。片田の頭越しにどんどん皆さんが交流して頂いているこの状況ができていて、本当に嬉しく思っております。お互いが刺激し合える、自立的に回る組織になってきました。次年度以降、何らかの形でこの体制を維持し、そして、発展的な活動に展開をしていきたいと考えていることは、昨日申し上げたとおりです。この枠組みの中にさらに、一生懸命にやっている先生方、参考になるような先生方にどんどん入って頂き、このレベルの議論がちゃん

とできるような組織をこのまま維持していきたいと思っております。

一方で、昨日の議論の中でもいくつか課題もあげられていました。一つは、ここに出てきている先生の意識ばかりが高まって、学校に帰ると他の先生方との意識の間に乖離ができてしまっているという問題です。どう広めていくのかという問題が一つ。

もう一つは、教師同士がこうやって交流し、意識が高まっているんだけど、子どもたちの交流が少ない。子どもたちが交流することで大きな成果があることを我々は知っています。何とかこの研究会の活動の一環として、更に拡大していけないか。何とかその体制を確保できるように、現段階ではまだ画策中としか言えませんが、そのへんの体制を整えるように、今努力もしております。

ここで、本プロジェクトに対するこれまでの文科省のご支援に心から感謝を申し上げるとともに、これを更に次のステージに向けて発展的に対応していきたいようにしていきたいと思います。今日は、さらなる発展に向けての中締めの会としたいと思います。

今日の登壇者を見て頂くと、僕の名前がありません。いつもしゃべりすぎてしまうので、最初の挨拶だけに留めて、あとは口を封じようと思います。主催者である我々ではなく、それぞれの地域で取り組んで頂いたこの皆さんに、客観的に防災教育を、自分たちはどう考え、この3年間取り組んできたのかをお話を頂ければと思います。そうすることで、次に向かつての課題も見えてくると思います。忌憚のない意見を頂ければと思います。今日の会が終わった段階で、統一した何か次に向かつての意識が、皆の共通認識としてでき上がってくることを望んでおります。

この3年間の取組の中締めにあたり、皆さまに感謝を申し上げますとともに、今日ここで新たに、次に向かつての意思の統一ができればと願っております。今日は一日よろしくお願い致します。

2. 本プロジェクトのねらいと 活動実績・成果

金井 昌信 (群馬大学大学院)

はじめに、このプロジェクトのねらいと3年間の活動実績・成果について、ご紹介させていただきます。

このプロジェクトは平成26年に、文部科学省の『リスクコミュニケーションのモデル形成事業』に、群馬大学が『姿勢の防災教育を通じた災害文化の形成』という研究課題で申請して採用されています。そもそものねらいは、「自然災害による犠牲者ゼロの地域社会の実現を目指し、小中学校における防災教育を推進し、それを継続する仕組みを構築することにより、地域の災害文化の形成及びその定着を図る」というものです。

そのために、皆さんに何度もお集まり頂いた『防災教育推進連絡協議会』の開催を通じて、『人材育成』と『実践継続のための仕組み作り』を行っていく。だから、連絡協議会に参加して集まって頂いた皆さんは、人材育成のターゲットであり、このグループの中でどんどんいい人を作っていこうというのがねらいです。そして、皆さんの地域が、皆さんの努力によって、防災教育を継続する仕組みを作っていくことを目指す、というのが、このプロジェクトのねらいというわけです。具体的には、防災教育推進連絡協議会では、「効果的な防災教育がどうあるべきか」、「地域、保護者を巻き込んだ継続的な実践はどうあるべきか」ということを参加者間で議論していくために立ち上げました。

皆さん、おわかりかと思うのですが、防災教育推進連絡協議会は、「防災教育をやりたいです」という人に来て頂いていたわけではないです。既に自らで実践していて、成果をあげていたり、壁にぶつかったりと、それなりの知見、経験を持った先生方にご参加いただいています。そういった先生方とレベルの高い所で議論したいということで、参加者をこちら側である程度厳選して毎回開催させていただきました。

これまで4回に連絡協議会は開催させていただきました。まず平成26年12月に岩手県釜石市において第



金井 昌信 (群馬大学大学院)

1回目を開催させていただきました。ここでは参加して頂いた全国8地域の皆さんから、今までどんなことやってきたという各地域の実践について発表して頂き、情報交換をさせて頂くとともに、継続的にこの会を実施していくにあたって、今後どんな議論をしていくべきかを意見交換させていただきました。具体的には、「これまでの防災教育の実施と効果って何だったのか」、「これから効果的な防災教育を実施していくうえで求められることって何なのか」、それから「継続的に実践していくためには、どんな仕組みが必要になってくるのか」というテーマについて、グループディスカッションを通じて、参加者の皆さんで議論しました。今までそれぞれの地域で何となく個別に頑張っていた皆さんが、一堂に会して問題意識を共有することができたということと、具体的に、「継続的に何を議論していけばいいか」という認識を共有することができたのが成果かなと思っています。それから、地域を超えて参加者同士で交流する機会のきっかけも作れたなと思っています。

2回目は、平成27年8月に、和歌山県田辺市において開催しております。ここでは1回目の議論を踏まえて、『防災教育に求められるコミュニケーション力』と『家庭・地域との連携した防砂教育』をテーマにパネルディスカッションとグループディスカッションを行い、意見交換をしました。その成果としては、生徒・児童の『災害に対する我がこと感』や『リアリティ』を高めるための『心を揺さぶる発問』、それから『実践的な防災教育における家庭・地域との連携の重要性とその具体的な手法』について、参加者で深い議論ができたと思っています。

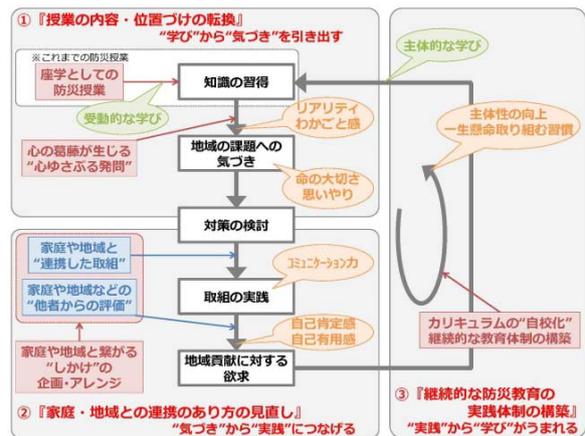
更にこの議論を踏まえて、平成27年12月に、高知県黒潮町において第3回を開催しました。前回の議論を踏まえて、開催地である黒潮町さんが、行政と学校が一体となって、地域をあげての防災教育を実施しているということで、それを事例にして、『地域と連携した防災教育』、それから前回に引き続き、『児童・生徒の心に響き行動を変える授業』について具体的に議論させて頂きました。その結果として、防災を題材とした実践的な学習は、いろんな効果ありそうだという可能性と、そういった効果を発現するために具体的なポイントについて、皆さんと問題意識を共有できたのかなと思っています。

ここで、これまでの成果として、具体的な実践のポイントを三点紹介させて頂きます。

一つ目は、座学で防災に関する知識を与える授業で得られた学びから、地域の課題であったり、家庭の課題であったり、自分たちの課題であったりと、自分以外の誰かに関連する問題ではなくて、「自分たちに直接関係のある問題なんだ」という気付きを与える、リアリティを高めてあげるとい授業が、最初に重要になるという点です。

次に、自分たちの問題だという気付きを与えたら、「地域のため、自分のため、家族のために今できることは何か」を考えさせ、それを具体的な実践につなげてあげるのが、二つ目のポイントです。このとき、ただ実践するだけじゃなくて、子どもたちにとって大切な家族であったり、地域であったり、地域のお年寄り、小さい子どもたちなど、そういう方々のための実践なので、そういう方々との連携を重視する。それから、自分たちでやったことを、そういう方々に伝える機会まで作ってあげる。実践を通じて、子どもたち自身が「誰かのためになったんだ」という自己有用感を感じられるような仕組みを作っていくことが大事なポイントでした。

そして、そこまでいけば、子どもたちは、自分たちで実践した結果からもっと地域を良くするために、「まだ自分たちに何かできることがあるんじゃないか」と主体的に学び出す、新たな学びが生まれてくる。このループを回していく、つまり実践的な防災教育を継続していくことによって、様々な教育効果



につながっていく可能性にある。このような主体的な学びの中で、主体性が向上したり、何事にも一生涯命取り組む姿勢が育まれてくるのではないかと、というのが三つ目のポイントでした。

さらに、この三つを継続的に実施していくことが、防災を核とした子どもを育む環境を作っていくことにつながる。学校での防災教育を継続することは、地域にしっかりと防災を学んだ大人を輩出し続けることにつながる。そうすると、学校だけじゃなくて、地域の大人たちが、子どもたちに防災を教えるようになり、子どもたちを育む環境が変わっていく。これが地域の文化につながっていく。長期的にそういうことを目指していきましょうと話もできました。

最後に、このようなポイントまでを踏まえて、昨日8月20日に、第4回防災教育推進連絡協議会を開催させて頂きました。これまでの議論を踏まえて、新たに出てきた実践の課題等を共有し、今後も継続的に集まって議論していく機会が必要だということを確認させて頂きました。

冒頭お話をさせて頂いた通り、このプロジェクト、目的は、人材育成と実践継続のための仕組み作りです。片田先生のご挨拶にもありましたが、本日のパネルディスカッションでご登壇頂く8名の中に群馬大学関係者は一人もいません。各地域で実践されている先生方が、このプロジェクトを通じて、防災教育に対してどのような思いを持って頂いたのか。それを見て頂ければ、このプロジェクトを通じて、どれだけ素晴らしい人材が育成できたのかを確認して頂けるかと思えます。以上です。

3. パネルディスカッション

(1) パネリストからの話題提供

畦地：皆さん、こんにちは。高知県の黒潮町教育委員会の畦地と申します。ほとんどの方が、第3回のときに黒潮町に来て頂いてらっしゃるので、どんな町かご存知だと思いますが、改めてうちの町を紹介します。東日本の後に内閣府が南海トラフの次の新想定を出しましたけども、34メートルという日本一の津波想定高をもらった町です。これを今私たちは自慢にしています。自慢にして、34メートルマークの缶詰事業を起しました。そして34メートルを逆手に取りながら、防災教育も進めたいなと思っております。そういうことがなくても、本当は本気でやらなくちゃいけないんですけども、非常に厳しい想定をもらったからこそ、本腰を入れるようになった。何でもそうですけど、二番じゃ駄目ですね。やはり一番はいいものだと実感しております。

本日は、この3年間で片田先生の下でいろいろ防災教育の実践をされた方々の代表として、7名の方にお集まり頂きました。今日のお話は「こんな防災教育をやりました」という話ではなく、「やった結果、こんな防災教育の可能性、一面が見えてきました、それをこの先、こういうふうにつなげたいんです」というお話をして頂くことになろうかと思えます。ですから、いろんな切り口が、本日は見えてくるので、それを是非学校に持ち帰って頂いて、これからの防災教育の実践に役立てて頂きたいと思っております。

それでは7名の方に、まずは自己紹介を兼ねながら、これまで防災教育とのそもそもの関わり、きっかけ、それから「取り組んでみて今こうなんだ」、「こんなことを感じています」ということをご発言して頂きたいと思えます。私の左から順番にお願いをしたいと思いますので、まず森本先生、よろしくお願ひします。



畦地 和也（黒潮町教育委員会）



森本 晋也（岩手大学大学院教育学研究科）

森本：皆さん、おはようございます。岩手大学の森本です。私は、震災の前年度まで釜石東中学校に勤務をしておりました、防災教育を担当しておりました。発災時は内陸の一関市にいたんですが、その後すぐ釜石の応援に行き、その後、4月1日からは、大槌町教育委員会で、学校再開のところをお手伝いさせて頂きました。その後、県の教育委員会に転勤になりまして、この3月まで4年間、県教育委員会で復興教育、防災教育を担当してまいりました。現在は、人事交流で岩手大学に勤務しています。

昨日は、連絡協議会に参加し得られた知見を基に、復興教育を通じて、県として、どういう政策ができるか、どういう取り組みができるかを昨日ご紹介させて頂いたところです。

今日のこの場を頂いたので、もう一度自身で「なぜ防災教育をやったのか」、そして、この連絡協議会で得られた知見を踏まえ、「震災前に釜石東中学校で取り組んだことはどうだったのか」を振り返ってみたいと思えます。

防災教育に取り組んだきっかけは、今から10年くらい前だと思います。初めて片田先生が、釜石で教員研修をやられたことがきっかけでした。私は釜石にトータル9年間勤務していましたが、最初の5年間は、少し社会科で取り上げたことがあるくらいで、防災について正直自分の中で本気ではありませんでした。「湾口防波堤もできているし、大丈夫だろう」というのが正直ありました。そのようなときに、片田先生の講演に非常にカルチャーショックを受けて、「やっぱりやらなきゃいけないんだ」と強く思いました。

講演を聞いた翌年、釜石東中学校に転勤になりました。まず、担当した学年で、総合を使って、いろいろ取り組んだ。そして、フィールドワークをした。その時に、地域の昭和三陸津波を経験した方にこんなことを言われたんです、「防災は特別なことじゃないんだよ。大事なのは日常生活なんだよ。なんで靴を揃えておくかわかるかい。なぜ服をたたんでおくかわかるかい。すぐに服を着て、靴を履いて外に逃げられるようにするためだよ。」と。それが、片田先生の講演の次に大きなきっかけです。「防災っていうのは特別なことじゃないんだ」「普段の生活なんだ」というところで、また大きな衝撃を受けて、震災の前年度、本格的に全校体制で様々な取組を行うようになったというところでした。

震災から5年少し経って、自分が担当していた生徒で、発災時に中学校2年生だった子どもたちが、ちょうど二十歳になります。それで、5年経過したところで、その子どもたちから、聞き取り調査を行っております。教師とすれば、自分たちがやったことを子どもからもう一回学ぶといいですか、どう成長したのかという結果を子どもたちから学ぶことは、教師の姿勢だと思うんです。防災に関して言えば、「災害が起きて、その時に避難した」というのは、ある意味で結果ですよ。そのため、あのときの子どもたちに聞くことこそが、大きな意味があるんじゃないかと思ひ、現在11人の子どもたちから

聞き取りをしました。そこで明らかになった点をいくつか紹介させていただきます。

一点目は『訓練の意味』です。子どもには、こう言われました。「あの時、がーっと揺れて、私は頭が真っ白になった。何をどうしていいかわからなかった。でも、体が動いていたんです」と。なかには、「危険を予測して、動いた」という子どももいるんですが、「どう行動していいかわからなかった。先生もいなかった。だけど、走っていた。そして、避難していた。」と。そして、「これは訓練のお陰なんだ」と、子どもたちみんなが言っています。

二点目は、子どもたちから、「大事なのは、僕たちが主体的に取り組んできた学習でした」と言われました。「ただ先生から話を聞くだけじゃなくて、自分が体を動かしたり、テーマを決めて、調べたりと、まとめたりしたことが大事なんだ」と。ある生徒からは、「震災前、僕たちは津波を知らなかった。だけど、フィールドワークで実際に被害があった場所に行った。そこで地域の人から話を聞いた。その場に立ってみた。ここでどれだけの被害があったのかを自分自身で学んだ。そして、それをまとめて、発表した。僕は、この取組が震災前だけ津波の経験則になったんだと思う。」と言われたんです。まさに学びがそこにあったんだと思います。

三点目は、まさに今よく中教審などで議論されている『オーセンティックな実感にある課題、真正な課題』です。ある子どもにこう言われたんです。「先生、『てんでんこ』って習ったよね。あの時、『津波の時には家族が心配でも家に戻ってはいけない』というのが私は納得できなかったんだ。いくら警報が出ているとはいえ、なぜ家族が心配なのに家に戻ってはいけないんだ。迎えに行ってはいけないんだ。自分の中でこれが納得できなかったんです。」と。彼女の中では、この課題がずっと続いていたんですね。「それで、お家の人と家族会議を開いて、『子どもがいざという時にどうするか』を家族で確認した。私はお父さんにこう言ったんです。『会

社にいて、心配だからって学校に迎えに来ないで。お願いだから来ないでね。』って。お母さんにも言ったんです。それで、実際に震災の時、お父さんは『迎えに行かなきゃ』と思って、行こうとしたけど、『そうだ、娘に迎えに来ないでと言われていたんだ』と。もし迎えに行っていたら、両石町を通り、鶴住居まで帰っていたら大変なことになったかもしれない。」と。まさに子どもたちの中に、『我がこと感』といいますか、「本当にどうしたらいいんだ」という強い思いが育まれていた。ある子どもも、『自分たちは危険に遭遇するかもしれないんだ』と、「自分たちは危険に遭遇するかもしれないんだ』と」言っていました。

四点目です。当時防災教育を行っていて、『小学校でやって、中学校でもやる』というのが、自分の中で常に意識していたわけです。小・中が連携した避難訓練も初めてやったわけですが、ある子どもにこう言われたんです。「小学校の時に、偉い先生が来て防災の授業をやりました」と。これは片田先生のことです。「そのとき、津波に備えなきゃいけないと思ったんです。そして、中学校に行き、『小学校の時に習ったあれってこのことだったんだ』と、中学校の学習で理解できた」と。これは非常に大事なことで、当たり前と言えば当たり前なんですけども、改めて子どもの話から確認させてもらいました。

そして、五点目は、「助けられる人から助ける人へ』が大事なことであったんだ」というのが子どもの口からも出てきています。「自分たちにもできることがあるんだ」ということをその時に学んだし、「地域のために何かできるんじゃないか」ということで、子どもたちのアイデアで『安否札』を配布した。そして、その『安否札』が実際に被災時に役に立ったこともあり、子どもたちからは、「自分たちが地域に飛び込んでいくことが大事だ」という言葉も出てきています。「先生、安否札を配りましたよね。配ったら、それをもたらった方が、『中学生からこんなものをもたらったよ』と、まだもらってない人に話をしたんです」と。「中学生がこんなことしてくれ

たんです」というのが、回りまわっておばあちゃんからまた自分に戻ってくる。こういうことで地域のつながりもできていく。その子は「あのお陰で挨拶をする人が増えた」と言うんですね。それから、「私たちは日常の中でも話をするようになっていったんです」と。当時の中学校1年生、2年生の女の子たちが、友達の家で遊んでいて、「もし、ここで大きな地震が来たら、周りは大丈夫だろうか。建物は大丈夫だろうか。ここは、どこに避難すればいいのか。」と。「学区が広がって、行動範囲が増えている中で、そういうことが普通の会話の中で出てきてたんです」というようなことも出てきています。家庭や地域を巻き込んでいくことがいかに大事なのかを、改めて子どもたちから学び直しているところです。

畦地：ありがとうございます。森本先生からは、震災に遭われた子どもたちから目の当たりにした具体的な変化をお話いただきました。この後お話して頂くのは、これからその未来がくる可能性があり、備えておかなければならない地域で防災教育に取り組んでいらっしゃる先生方になります。大句先生、お願いします。

大句：小木中学校の校長の大句と申します。

地元の新聞紙上で、東日本大震災があった後、マグニチュード7.8級で11メートル以上の津波が小木港に寄せると載りました。更に、小木もリアス海岸なので、波がせり上がり、15メートルになるといわれ、衝撃を受けました。また、町の商業施設の前で、生徒会が募金活動を行ったんですけれども、「東日本大震災に募金をお願いします」と言ったところ、1時間で16万円が集まりました。子どもたちはお札を入れて下さるのを見て、「なんでこんなに」と思った時に、大人の方は、「小木もリアス海岸なので他人事ではないんだな」と実感はしていました。

そんななか、平成23年4月に防災教育を立ちあげた校長が小木中学校に赴任をしてくま

た。今ここで東日本の大震災から学ばなければならぬんじゃないかと、校長は思ったんだと思います。そこで、「防災教育やるぞ」ということで、その時教頭だった私は、よくわからないけど、ついてきた次第です。

3年間振り返りますと、中学校の実践を報道機関も使って発信してきました。「今日これからこんなことします」とか、「来週こんなことします」ということを報道機関に連絡すると、取材に来てくれる。その取材は新聞社のこともあれば、地域の広報のこともあれば、テレビのこともあります。取材に来てくれると、子どもたちがインタビューを受けるわけです。子どもたちがマイクを向けられた時に、しどろもどろになるんじゃないかなと思ったんですが、割と堂々と話をしている。それは、「今まで行動してきて、自分のしてきたことを話すだけだからなのかな」と思うんですが、自分の言葉で語っているところを見て、凄い効果があるなと思いました。

そうした発信をしている時に、常に私たち、小木中学校は幸せだなと思ったのは、サポーターと言われる人の存在です。勝手にサポーターにしたのですが、元保護者です。平成23年は避難所体験をしました。その後ずっと今年まで、今年で6回目になるんですが、小木地区全体をあげて、中学校が呼び掛けた避難訓練を実施しています。また、避難経路のDVDを作ったときには、その時の校長が「100本欲しい」と無理難題を言っても、100本作ってくださった。というように、サポーターの方が増えていっているということも、ありがたいことです。

平成26年に自分が校長として小木中学校に戻って来たときには、同時に自主防災組織ができていました。前の校長が町の人に呼び掛けて、自主防災を作ったと思います。このように横につながりながら、これまでの6年間は活動してきたと思います。

小木中学校の防災教育は、小木もリアス海岸ということから始まりました。子どもたちも、



大句 わか子 (能登町立小木中学校)



「小木から一人の犠牲者も出たくない」と呟いているわけです。それをどう実現していくかということで、まずは町の人にも、「津波って怖いんだよ」、「逃げて欲しいんだよ」ということを知ってもらいたい。そのために、自宅の標高を知ってもらいたい。しかし、ハザードマップは町では作られていませんでした。そこで、中学生がハザードマップを作った。この頃はまだ補助はもらっていませんでしたが、全戸配布をした。その他、中学生が主催で、津波フォーラムを行い、夜に集まって頂くという活動を行いました。

活動を続ける中で、たくさんの人に避難訓練に参加してもらうために、学校から飛び出して、地域のお年寄りと交流をする。保育園児と交流をする。その時に『防災の歌』を作りました。小学生と交流をする。小学生の授業の中に、津波のメカニズムであるとか、逃げ方であるとか、避難三原則とかを織り交ぜながら出前授業をする。そして、『防災体操』、『防災カルタ』というものも作りました。『防災体操』は大学生との交

流を通じて完成しました。

そして、避難訓練を实行了しました。中学生が「〇〇町内は集まってください」と呼び掛けて、町内の方たちがその子どもたちの前に集まり、点呼をとりました。小木の人口は1,900名ですが、850名が参加してくれました。昨年は810名。一番最初は300名です。

『授業の中で』ということで、このように『防災』のための時間を確保しなくても、国語、音楽、家庭科、技術の授業、総合的な学習等を織り交ぜながら、授業を工夫して、タイアップさせながら、無理なく防災を学習してきました。

『小木中の活動の発信』についてですが、石川県には『石川県子どもドリームフェスティバル』というものがあって、それに応募して、県の大きなステージで、津波避難三原則に関する防災劇をしました。すると、県の防災学習会で、もう一回やってくれないかという依頼がありました。そしてその後、『いしかわ教育の日』では、稲村の火を劇にしました。テレビや新聞に取り上げられたり、サポーターがDVDを作ってくれたりすることで、子どもたちが取材に答えることが多くなり、それに答える中で、自らの思いをより強くしていったように思います。

その他の外からの依頼では、「小木中学校は防災しているよ」ということが広まり、隣の中学校で活動する時に、「とっかかりとして、小木中学校の生徒が隣の中学校へ来て説明してくれないか」と言われたり、地域の生協が「防災学習会をしたいんだけど、出前講演会をしてくれないか」と言われて、中学校3年生20名が出掛けて行ったりしました。また地域の健康クラブから、「防災体操を教えてくれれば、お年寄りの60名の方がいつでもできるのにいいね」と言われたので、防災体操を教えに行ったり、活動が広がっていきました。他にも今日のような感じで、管理職に対してパネルディスカッションのパネラーなどの依頼もありましたが、頼まれたらいやと言わないことにして、出ています。

授業の中で

- 国語・・・小学生にわかりやすく伝えよう。
「津波が起こるメカニズム」
「津波から逃げる」「避難所に必要なもの」
「あなたの家は海抜何メートル？」
- 音楽・・・防災の歌作り
→ 技術・家庭・・・保育園で披露
- 技術・・・標高看板作り、エコキュブラジオ作り
- 家庭・・・防災ずきんになる座布団作り
地震に強い家（家具の配置）
- 総合的な学習
・・・出前授業、避難訓練計画、防災学習会、
避難経路誘導灯（ペットボトル作りと設置）



子どもたちが、『防災カルタ』という大きなカルタを作りました。特に読み札がいいんですけど、逃げ方あるいは備え方などを、子どもたちが自分の言葉でカルタにしました。社会福祉協議会の方が、これを見られて「凄いいから、400組作らせてくれ」ということで作ってくださり、地域の老人会、地域のクラブ、健康クラブ、小学校・中学校に配っていただきました。ところが、400組作ったんですけど、足りなくなりました。それで、今年また300組を作ったということで、大変ありがたいことだと思っています。

その後、県外からの視察で、多くの方に来ていただいています。畦地さんには2年前に来ていただき、昨年度、大阪から木下先生も来ていただきました。また今年5月には、摂津市から8名の方が来られました。その時、「これは利用するチャンスだな」と思いまして、子どもたちに、「摂津の方に小木のことを説明できるように、現地へ行って調べてきなさい」という課題にしました。子どもたちはいろんなことを発表してくれました。小木は漁港で、たくさんのインド

ネシアの方たちがいます。そのため、「日本語の看板だけでなく、インドネシアの人にわかる看板を作らないと駄目じゃないか」という子どもたちの発想から、看板を作っています。これを聞いた摂津市の方からは、「いろんな立場の人のことを考えているので、凄いね」と、私たちの気付かないことをまとめてくださったりしました。視察を通じて、客観的な意見を聞けて参考になったし、今後更に発展した防災教育を行ってきたいという意欲がより高まるという、思わぬ効果もあります。

また、畦地さんが視察にいらした際に、「外から来た人は、高台はどここの坂道から上がればいいのかわからないので、もうちょっと明確な避難の印がないと駄目なんじゃないか」という畦地さんのアドバイスを受けまして、避難所・避難場所への誘導灯として、ペットボトルを作って設置しました。これは、ペットボトルのような形をしたもので、ソーラー電池で夜になったら光ります。町から自主防災活動への補助金として、年間200万円を3年間もらっていたので、その予算でこれを買わせてもらいました。ペットボトルは、1個650円します。

最後に、自主防災との連携についてです。自主防災の組織は、小木の町会長さん、青年会、商店連盟、婦人会、防災士の会の方々が連携して、能登町に申請したんだと思います。先ほどお話したように、町から年間200万円ずつ、3年間頂いたので、備蓄庫を設置し、備蓄の内容を充実させました。毎月15日を防災の日にしているんですが、地区へのチラシを全戸配布したり、避難訓練の実施にも使っています。

『つなげる、広げる』ということで、保育園、小学校、高校、大学校と連携してきました。また、去年から、町の総合防災訓練（日曜日）を登校日として実施されるようになりました。そして、「全部の学校で小中学生が避難所を開設し、住民を受け入れなさい」という話になりました。校長会でそれを聞いた他校の校長たちが、「どの学校も小木中みたいのできるわけがない」と



反対もありましたが、町は押し切りまして去年行いました。今年の2回目も、総合防災訓練として、小中学校登校日に避難所開設を行います。

他の中学校との交流や連携としては、輪島中学校とは新しい非常食の開発などを行っています。また、昨年の総合防災訓練の反省から、町内の4つの中学校から生徒を集めて、『私たちの防災宣言』というもの提言したりもしました。

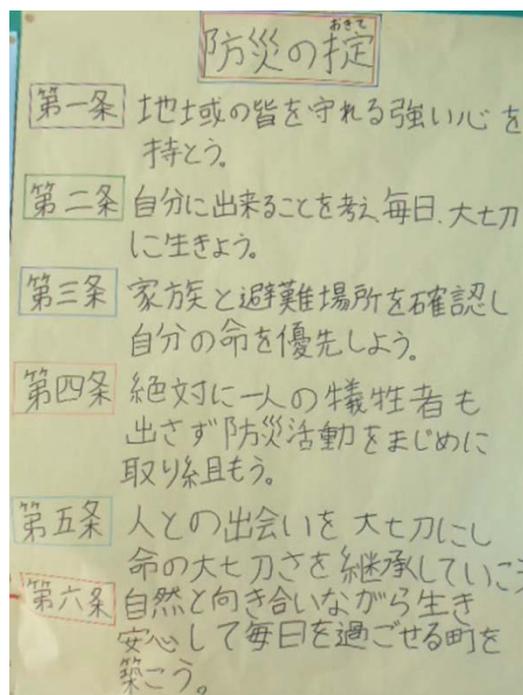
ちょっと話飛びますが、今年の8月10日に、夜の避難訓練を行いました。明るい時とどう違うのだろうかということを見発しました。これを行うときも、職員全員が賛成じゃないんです。皆が「これはいいことだ」と動くわけではありません。最初は、「なんでそんなことしなきゃいけない」とか、「たくさんやることがあるのに、新しく入ってこられると困る」とか、「本当に被災したわけでもないのに」とか、動きが鈍い、あるいは反対を向く職員はいます。しかし、今年は生徒会を担当して、去年今の3年生を担当していた先生が、「この子たちにも何か先頭だつてやらせたい」ということだったので、去年卒業した子たちが「実現してほしい」と言っていた夜の避難訓練を実施することができました。その時、私は口をはさみませんでした。本当はもうちょっとこうして欲しいなと思っても、その先生が考えたようにやってもらいました。

ここ2年間は、岩手県の湊中学校に修学旅行でお邪魔しました。そこに行くことで、子どもたちは、湊中学校の子どもたちの強さと温かさ、そして全てを受け入れて、そのうえで自分たちの被災を語ってくれるその姿を見て、「防災は本

当にやらなきゃいけない」と刺激を受けてきました。今年予算がないので、補助を出すことができず、湊中学校へは行けません。そんななかで、先ほど言った頑なだった教員が、「去年の修学旅行で行った後の子どもたちの活動を、湊中学校の人にお礼として送りたい」と、自分から湊中学校へお礼の資料を送りたいと申し出てくれました。頑なだった先生にも、長い時間がかかるけど、納得の仕方があるのかなと。子どもたちは凄く早く納得しますが、大人はなかなか納得できなくても、そういうふうな納得の仕方ができるのだと思います。

昨年、片田先生にも来ていただいたのですが、道徳の発表がありました。道徳と防災という切り口で、片田先生には講演もしていただきました。その時の子どもたちの全国学力調査の質問紙の「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか」という間について、全国が33%なんですけど、本校の3年生は66.6%。同じ質問紙を、今の3年生にこの春やりましたところ、もう少し高い数値が出ました。ということで、自分たちが自主的に行い、少しずつアレンジして、先輩と同じ活動ではなく、新しい活動を入れていくことによって、古さを感じさせず、またやらされ感が少なくやっているのかなと思います。

これまで、子どものつづやきが活動をつないできました。「小木から一人の犠牲者も出さない」、「避難参加者を増やしたい」ということから始まり、盛んな活動になってくると、どうしても無口な子は役割をもらえず、隅っこのほうにいます。それに気づいて、「あなた、これやってくれる」と声をかけると、「私にも役割をくれてありがとうございます」と返してくれる。「みんな、やりたいんだ」と実感しました。今年も、熊本地震を受け、2年生が「この小木が熊本地震を目の当たりにして何もしないわけにはいかないでしょう」という発言もありました。今そのように進んできております。去年の3年生、今の高校1年生が、後輩に残したいこととして



『防災の掟』を第6条まで作ってくれました。『命』という言葉が、いろんな形を変えて出てきていて、小木中の宝だなんて思って校舎内に貼ってあります。以上です。

畦地：僕も行かせてもらいましたが、小木中学校が一生懸命頑張って、地域が変わり、子どもたちが変わっていることは、現場に行くと本当によく実感できます。是非、皆さんも一度は小木中学校に行ってもらいたいと思います。

続きまして、嶮口先生よろしくお願ひします。

嶮口：田辺市教育委員会の嶮口です。よろしくお願ひします。昨日も新庄中学校の担当の先生に、新庄中学校の取り組みを紹介して頂いたり、昨年度は田辺にも来て頂きました。今日は、個々の学校は様々な取り組みではなくて、田辺市全体としての取り組みを紹介させて頂きます。

僕は6年前に教育委員会に入ったんですけども、3.11が起こって、1ヶ月後です。それまで、自分自身が全く防災を勉強していないなかで、その1年目に、ある大学の先生に新庄中学校で出会ったんですけども、「これだけ凄い防災教育をしているのに、なぜ他の学校には広まって

ないの」と言われて、これは教育委員会の責任なんだと痛感しました。そういうところの反省から、田辺市全体で小中学校は 41 校と多いんですけども、この 41 校の子どもたち全員に防災教育を浸透させるのは、どういう方法があるのかなというのを模索しながら、今まで取り組んできました。田辺市は和歌山県の 22%、約五分の一の面積があるんです。端から端まで 1 時間半かかります。だから、災害種別が 3 種類あるというところなんです。

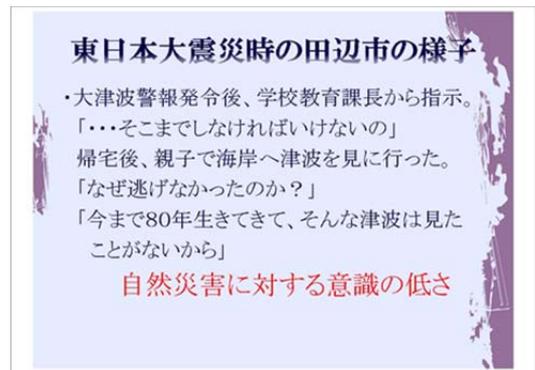
6 年前の 4 月に学校教育課に入りまして、課長から「防災を担当せよ」と言われました。それで、「震災当日どうだったんですか」ということを課長に聞いたんです。すると、大津波警報発令されたあと、沿岸部の学校に人手分けをして、「すぐに子どもを最上階に上げるように」と校長に指示を出したところ、「なぜそこまでしなければならぬのか」という声もあったようです。それから子どもに聞くと、「帰ってから親子で津波を見に行った」という子もいた。また、87 歳のおじいちゃんに聞くと、「もう 80 年間も、わしは津波を見てないから大丈夫だ」と言っていた。自然災害に対する意識が低いということを課長から聞きました。

余談になるんですが、先週、日本損保の方と話す機会がありました。47 都道府県の地震保険の加入率を見せてもらったんです。和歌山県は南海トラフがあるから高い方かなと思っていたんです。1 位は宮城県、高知県が 2 位でした。でも、和歌山県は 28 位だったんです。あまり関係ないかもしれませんが、意識がまだ低いのかなという気がします。

そんななか、半年後に台風 12 号水害が起きました。本宮という地域では、2 日間で 1,000 ミリを超える非常に強い雨が降りまして、土砂災害により国道も寸断されました。深層崩壊という大きな地滑りが発生し、非常に被害が大きかったところです。山だけでなく、河川もはん濫し、スーパーの 2 階のところまで水が来ました。世界遺産の本宮の大鳥居の前も浸水しまし



嶮口 善一 (田辺市教育委員会)



た。この台風によって、田辺市全体で 8 名が亡くなり、1 名が行方不明者となりました。また、数ヶ月間、避難せざるを得ないというような状

況の地域もありました。

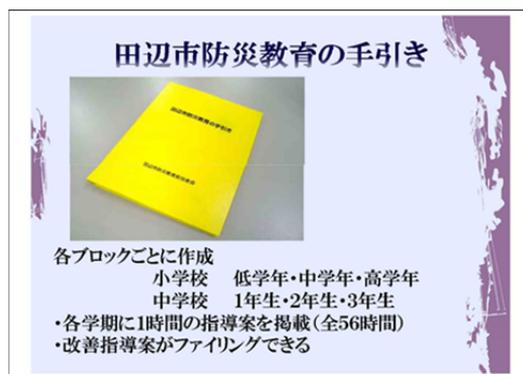
この状況を目の当たりにした時に、「津波想定
の防災教育だけでは駄目で、津波と洪水と土
砂災害、この3つを一緒にしていかなければい
けない」と教育長から言われました。もの凄く
難しいことだと思ったんですけども、「まず何
をするか」と考えたときに、組織を作らなけれ
ばいけないと思ったんです。

それで、翌年、防災教育担当者会というのを
立ち上げました。3種類の災害に対応できるよ
うに、沿岸部ブロック11校、中山間部ブロッ
ク10校、山間部ブロック2校と、全41校を3
ブロックに分けて組織作りを行いました。

平成25年度からの取組の概要です。平成25
年度は1年目なので、市民の人たちにも周知を
しようということで、防災シンポジウムを開催
しました。片田先生と当時釜石高校3年生だっ
た菊池のどかさんに来て頂きました。500人く
らいの子どもが参加したのですが、感想を聞くと、
大人からではなく、菊池さんは高校3年生
でしたが、子どもからの言葉、語りに胸を打っ
たという感想が多かったです。

それから、新庄中学校はいろいろしていたん
ですけども、他の学校はあまりしていなかった
ので、各学校で1年間、防災教育として、どん
なことをしたのかをとりまとめ、取組集を作り
ました。

平成26年度から、釜石さんとか尾鷲さんの
ような手引きを作ろうということで話し合いま
した。教職員が600人、子どもが6,000人いて、
非常に広いということで、まず何をすべきかを
話し合った時に、「やはり子どもたちの意識を変
えなければいけない」ということになりました。
そして、子どもの意識をどうするのがいいかと
考えたときに、やはり「先生方の意識を変えな
ければ、子どもには伝わらない」ということにな
りました。41校から担当者が1名ずつ担当者
会に出て頂いて、平成26、27年度で手引きを
作ることにしました。自分も教師ですが、「自分
で授業を作るという、苦しいことをすることに



よって、先生方の意識も高まるんじゃないか」
と考えまして、2年間かけて手引き作りを行いま
した。それで今年は、手引きを使った授業を
4月から始めさせて頂いて、8月3日にその成
果の交流会を行ったところであります。

防災教育の手引きは、ブロック毎に作成して
いるんですけども、小学校低・中・高学年、そ
れから中学校の1年生から3年生まで、各学期
に1時間の指導案を用意するというので、全
56時間分の指導案を作っています。全て先生方
の手作りです。この指導案集の特徴として、改
善指導案をファイリングできるような形で作り
ました。現状の案は最低レベルというか、「これ
くらいの防災教育はしたいね」という教科書み
たいなものなので、「これを基に、どんどん実践
を重ねて、改善してってください」と先生方
にはお伝えしているの、ファイリングできる
ようにしています。

それから、昨年度、黒潮町で太田先生の授業
を見て頂いたと思うんですけども、昨年度は2
学期に3部ブロックの代表者に授業をして頂き
まして、それを皆で視聴して、交流しました。

これは今年も行う予定であります。

この手引きなんですけども、4月以降様々なメディアに取り上げられまして、全国から画像の問い合わせがありました。例えば、ある町の防災管理局から「それを頂きたい」であるとか、自主防の会長さんからも声を掛けて頂きました。一番印象的だったのが、目の不自由な方がこの手引きのことを知ったらしく、点字図書館を通じて教育委員会に電話が掛かってきて、「頂けませんか」というお話も頂きました。非常に嬉しかったです。

今後まずはこの手引きを使って、各学校でどんな成果が得られたのかを検証しながら進めていきたいと考えています。

畦地：続きまして、松本先生、お願いします。

松本：皆さん、こんにちは。新宮市立緑丘中学校の松本といいます。私は大学を出て、横浜市立工業高校に就職をさせて頂いて、電気科の教師をしていました。その後、Uターンで地元の学校に帰ってきました。先ほどの嶮口先生のお話の中で水害のあった地域が私の出身地になります。

田辺市さんとは平成の大合併により、隣同士になりましたが、それまでは5つ、6つ離れた市でした。新宮市も平成23年の水害では、先ほどの紹介された地域の下流にあたるので、大打撃を受けています。新宮市は、学校統合等ありましたので、現在は小学校と中学校が5校ずつ、いずれも同じ学区となります。山間部が2校、沿岸部が3校ということです。

本校は、各学年3クラス、特殊学級が2つということで中規模校になりますが、新宮市の中では、割と大きめの学校になります。

先ほどの水害が発生した9月4日に、全校集会を実施し、その後実施する防災公開授業までの期間を、『防災を学ぶ期間』と位置付けている状況です。今年は、9月4日が日曜日なので、2日金曜日に全校集会を実施する予定です。それから、防災講演会をどなたかに依頼しているん



松本 潤 (新宮市立緑丘中学校)

自己紹介

新宮市について

- ・紀伊半島南東部に位置
- ・5小中学校区があり、うち3校区が沿岸部



本校について

- ・各学年3クラス 特支学級2クラス
- ・9月4日の全校防災集会から11月の防災公開授業までを位置づけ

Page 1

ですけど、今年は地元の先生にお願いをしています。そして、全校で防災公開授業を実施するまでの期間を区切って、集中的に防災教育を行うようにしています。以前は年間計画にバラバラと取っていたんですけども、ここに集中する形になっていきました。

平成23年の水害の様子です。軽トラックが崖に引っかかっています。この道は国道で、左側が川なんですけど、ここから川底まで十何メートルあるんです。軽トラの位置まで水で上がったということは、どれだけの水位になっていたのか。川幅は300メートルくらいの川なので、いかに大量の水がきたのかわかると思います。我々は雨の多い地域に住んでいるので、雨には慣れっこんなんですけど、この時ばかりはとんでもないことが起こったと思っています。先ほど嶮口先生が本宮大社の写真を紹介してくれましたけど、あの本宮大社が熊野神社の全国の総本部です。それが100年前にも流されて、上流の奈良県の十津川村というところが大打撃を受けて、北海道に集団移民をするというよう

な水害がありました。それとほぼ同等ではなかったかと言われています。

昨年の全校防災集会では、黙祷に始まり、災害への備えについて学校長から話があり、それから、私が昨年行われた田辺市の推進連絡協議会のことを報告させて頂きました。それから、防災組織や、給食で防災食を出しましたので、それについての説明等を行いました。集会といっても、人数がある程度いるので、対話型の集会ではありませんが、「ここから防災の学習をしていくよ」というスタート地点に立つという意味合いも持っています。

防災の授業は、座学的な授業ではなくて、調べて、まとめて、発表する形式を比較的取っています。公開授業の前にも当然防災授業をしていくんですけども、公開授業に先立って、いろんなことをやったりとか、公開授業の日に2時間セットで防災の授業を行い、2時間目を公開しているというクラスもありました。公開授業には、保護者だけでなく、地域の方にも呼び掛けましたが、参加者が少なかったのです。そこで、今年は10月1日の土曜日に開催してみることになりました。

去年なんですけど、元校長をしていた社会科が専門の先生に非常勤講師をしていただいています。その先生が地元の新聞記事に大変お詳しく、南海大震災の新聞記事などを集めて、特別展示してくれました。公開授業のときにこれも公開させて頂きました。

私自身は今の学校に来るまでは、教育委員会で7年間指導主事をしていて、防災教育を担当していました。そのときの経験も踏まえて、意識していることなどをお話させて頂きます。

まず、『防災教育の重要性を、全職員が認識をするようにすること』はかなり意識してきました。教育委員会にいた時は、全学校の先生でと思いましたが、学校に赴任してからは、今の学校の全職員で、ということ意識するように心がけています。今は、何かがあった時、必ず職員朝礼で伝えるようにしています。熊本地震



もそうでしたし、どこかで地震があったとか、どこかで災害があったとか、そういう話をして、そんな時に必ず意識を持てるようにしています。そして、それを子どもたちに教えていくことが、いかに重要かっていうことを認識してもらおうとしています。

右側の写真は、学校の屋上の高さを示しているものです。左側の写真は、市の防災対策課が設置した鍵ボックスの説明の掲示です。学校の屋上が避難場所になっているので、震度5弱以上の地震が起きると、鍵ボックスのロックが外れて、鍵が取り出せるようになります。避難してきた住民の方が、その鍵を使って開けられる

ようになっているのですが、これもまだまだ周知が足りていないので、是非広めていきたいと思っています。

他に意識してきたことは、『系統立てて、継続して実施する仕組みを確立する』ことです。先ほどの防災集会は、現校長のアイデアです。校長が「やるぞ」と言いました。校長自身は、前回の水害で自校の生徒を3名亡くしています。その思いは、やはり大変重いもので、「もうこんな思いをしたくない、させたくない」という思いがありました。そんななかで、校長のリーダーシップが発揮されているところではあります。また、それに対して、私自身もそうですし、全職員がどうやって継続していけるのかなっていうことをかなり意識をしてきました。

それから、最後に『自主性』です。教育委員会にいたときは学校の自主性を重視しましたし、学校に赴任してからは各教職員の自主性を重視しましたし、先生方には生徒の自主性を重視するようにしてもらっています。特に教職員には、「防災の授業をいかにかうまくやるか」ということもそうなんですけれども、「負担にならないように」というか、「うまく工夫して」というか、「自分のカラーを出して」というようなことを伝えています。だから、内容についてどうこうと伝えたことはあまりありません。

以上、本校の取り組みについて紹介させていただきました。ありがとうございます。

畦地：続きまして、西本先生、お願いします。

西本：大方中学校の西本といいます。私は黒潮町5年目で、昨年度まで佐賀中学校に4年間おりました。昨日、宮川先生が大方中学校の実践については発表してくださいましたので、私からは、佐賀中学校でのことを中心に話をさせてもらいたいと思います。

4年前、佐賀中学校に赴任しました。その時に、最大津波高が34.4メートルという想定が公表されたことで、職員もどうするんだというこ

意識してきたこと②

■防災教育を系統立て、継続して実施する仕組みを確立する



意識してきたこと③

■自主性を大切にする



西本 貴俊（黒潮町立大方中学校）

とで、非常に困った感が強かったスタートでした。そんななかで、高知県の実践アドバイザー事業というのがありまして、その事業を受けることになりました。そこで、避難訓練を実施した後、大学の先生による講演会がありました。昨年度、黒潮町に来て頂いた方には、避難路として整備された道をのぼってもらいましたが、当時はまだケモノ道でした。全く舗装されていない道で、雨が降れば滑る、長いこと木影です。雨が降った後は何日も乾かないという状態でした。そのような状態だったので、私はその

避難訓練の際、下山の時に足を滑らせて、手に枝が刺さってしまい、枝が刺さったまま病院に行くことになってしまいました。そのため、アドバイザー事業の講演会を聞いていませんが、その大学の先生は、「この地域は、大きな津波が来たら諦めてください。命は助かりません。」と言われたそうです。そして、翌日、その話を聞いた3年生の担任の先生が私に「あなたはいなかったからわからないだろうけど、昨日腹が立った」、「なんで津波が来たら諦めなきゃいけないんだ」、「何のために講演に来たんだ」、「助かることを教えないと、何もならないのに」と言ってきました。「じゃあ、自分らで子どもの命を守るためにどうするか、やっぱり自分らでやっぺいかなきゃいけない」というのが、佐賀中学校の防災教育の始まりでした。

その先生を中心に、何もなければ試行錯誤して、保管しているビデオ、3.11の映像やドキュメントを基に、その先生が中心となりまわりの先生を先導して授業を行っていかれました。そんななかで、2年、1年の学級も、その先生の資料を基に授業を進めてくれることになりました。この時は、本当に自発的に先生方が動いてくれて、「防災について取り組んでいこう」という機運は高まっていきました。しかし、翌年度、その先生が異動になりました。

実践的防災教育推進事業を受けたんですが、メンバーが変わったことによって、ここで少し後退をします。『人任せの防災教育』という感じになってきたんです。「授業をこなしていけばいい」という風潮が広がっていく中で、「じゃあ授業はどう組み立てていくんだ」という葛藤がありました。一方で、小学校と連携をすることになり、小学校の先生と意見交換をすることが多くなりました。また、教頭会でも防災教育について、年に4、5回話し合いをし、防災教育の実践事例を基に、どう進めているのかを念入りに話をしてきました。そういったものが支えになって、少しずつ形ができたのが2年目でした。

そして3年目、町で防災教育の作業部会を立

ち上げて、津波防災プログラムを作ることになりました。ここで町長が前を走って、教育委員会が先導してくれて、我々がついて行くという形がスタートしました。今から2年前です。そこで、片田先生、金井先生はじめ群馬大学の方々に助言を頂き、「命は自分で守るもの」、「自分で守れる子どもを作っていくことが大事」、「諦めることはない」と助言を頂き、心強くなり取り組みを進めていきます。

そして、取組の中で思ったことは、避難訓練を重ねるなかで、子どもたちは間違いなく行動が身に付いていくということです。例えば、数年前に発生した伊予灘地震では、黒潮町は震度4の揺れでしたが、ある子どもは非常持出袋を持って、お父さんに「今から逃げよう、すぐ逃げよう」と言いました。ところが、お父さんは「津波は来ないから大丈夫」と言い、その直後、テレビに『津波の心配はありません』とテロップが流れて、「ほらみてみろ」と言われたそうです。その時に、その女の子は涙を流して、「もし来たらどうするの」、「お父さんがそんな考えだったら、私も死んでしまう」、「地震が来たら逃げるのが大事だから、やっぱり一緒に逃げて欲しかった」と訴えたそうです。そういった子は数名おられますし、夜でしたが、避難場所に逃げた子もたくさんいました。これまでやってきたことが、子どもたちの力になっていることは間違いありません。

そして、町が進めている防災教育も、町が主導で行ってくれていることもあり、管理職をはじめ教職員も、少しずつ意識が高まってきていることも確かです。ただし、教職員に『我がこと感』があるかという点、そこは少し疑問です。昨年度、作業部会の活動として、佐賀中学校で授業研究を行いました。その授業研を行う際には、先生方が自分のこととして研究を進め、そして、授業の素案作りを行ってくれました。そういった何かのきっかけがあって、教師が自分のこととして捉えてくれると、子どもたちの心を打つ授業ができるのかなと感じました。やは

り、子どもに『我がこと感』を持つと言う以上、教師が『我がこと感』を持って取り組むことが、一番大事ではないかということ強く思っております。

佐賀中学校で『佐中祭』というイベントを行っています。そこであがった収益を、2年前から子どもたちは地域の人と一緒に、社会福祉施設と東日本大震災の被災地の中学校に寄付しております。僅かですが、少しでもお役に立てればということで、生徒会からの寄付という形で行っています。これはまだ学校としてのつながりにはなっていないので、今後は生徒会同士のつながりから学校同士のつながりへと発展していくてくれればなという思いもあります。

また佐賀中学校では、今年から専門委員会の中に防災委員会が立ち上がりました。これは、子どもたちが地域のボランティアや防災について考える場を作るために立ち上げました。私は異動してしまったので、実際の状況はわかりませんが、先日も新聞で報道されたということなので、頑張ってくれていると思います。

このように、本当に一人の教師の怒りから始まった防災教育ですが、教師が真剣に防災教育と向き合っていかなければ、進んでいかないと強く感じております。

畦地：先生がお話していたのは、平成24年度のアドバイザー事業ですかね。私は25年度から教育委員会にきたので、その事実を知りませんでしたけれども、聞いていた先生は、「馬鹿にするな」、「俺たちの命はどうでもいいのか」という怒りが、大きなエネルギーになったということなんだと思います。そういう意味では、その講演に来て頂いた大学の先生に感謝したほうがいいのかもしれないね。

続きまして、五十嵐先生、お願いします。

五十嵐：新潟県の魚沼市立湯之谷中学校の五十嵐一浩と申します。よろしく申し上げます。ここに並んでいる先生方と私が大きく違う点は、新潟



五十嵐 一浩（魚沼市立湯之谷中学校）

県の場合、もちろん津波の危険もあるんですが、多くは土砂災害とか水害とか、内陸部で発生する災害を主にしているところかなと思います。私が防災教育に取り組んだきっかけは、平成16年に発生した新潟中越地震です。私自身も被災しましたが、地震が起こって、目の前で、本当に手の届く距離で、一人の人間が死んでいくのを目の当たりにしました。そこから、「災害から命を守る」、そのためには「子どもたちに自分で自分の命を守るっていうことを身に付けさせなければいけないんだな」と強く実感して、防災教育に入っていました。

ここで私も、十何年間どんな防災教育をしてきたかをお話したいんですけども、素晴らしい実践をされている方々がいっぱい話をさせていただきましたので、私は、『防災教育が果たす波及的な効果』についてお話をさせて頂きたいと思います。今『波及効果』という言葉を使いましたように、防災教育は『命を守る教育』であることに間違いありません。これが防災教育の唯一無二の目的であることは間違いありませんが、やっていくなかで、いろんなところに効果が現れている。それをご報告したいと思います。

本日お話するのは、新潟県内にあるA中学校で取ったデータを基にしています。ここでデータを取ったA中学校について簡単にご説明致します。A中学校は新潟県の中規模都市に立地しています。全校生徒は約300人。13学級の中規模校です。校区内は住宅地と農地が混在していて、保護者は古くから続く地場産業や農業に

従事している方が多くいる。そういう学校です。

そして、このA中学校が防災教育に取り組んだのは、2012年に新潟県防災教育プログラムのモデル校に指定されたのがきっかけになります。それまでは、ほぼ防災教育とは無縁の学校でした。2012年に指定されましたので、翌年から何をするかを考え始めたのがスタートです。ですから、実質的な始動は2013年からとなります。

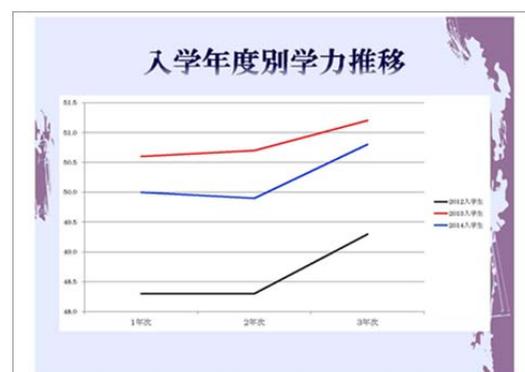
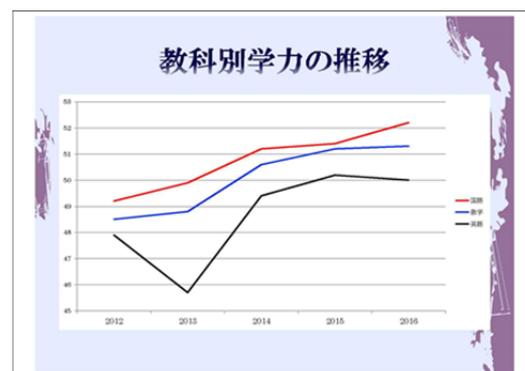
2013年は、年間20時間の防災授業と、地域や外部機関と連携した避難訓練を実施するとともに、校内防災教育推進教師を校務分掌上に位置付けて、防災教育推進委員会を校内に設置しました。

2年目の2014年は、小中学校による一泊二日の防災キャンプ、学区内に小学校が3校あるんですが、それらの小学校と合同の避難訓練を実施しました。それに伴って、小中合同の防災教育推進委員会を立ち上げました。この年から校区内の小学校でも、防災教育がスタートしています。

2015年には、3年生全員で中学生自主防災団を組織しまして、年間10時間の防災訓練を受けるようになりました。

今年度については、市の防災訓練と同日に、地域をあげた避難訓練を行っています。また、全学級が防災授業を地域の保護者に公開したり、共に授業を作り上げたり、避難所での高齢者対応として、福祉授業も始まったところです。

このように、A中学校での防災教育は、年々質量共に拡充してきたわけですが、これに比例して学力も上昇してきました。このグラフは教研式標準学力検査、通称NRTの学力偏差値を2012年から今年度まで表したものです。防災教育の始まった「2013年から着実に上昇しています」と言うと、「2013年が一番低いじゃないか」と思われるかもしれませんが、ご存知のようにNRTの結果は、前年度の結果を表しますので、2013年度の実践がもし学力に反映するとなると、2014年の結果になるわけです。ですから、学力が徐々に向上していると言えるかと思いま



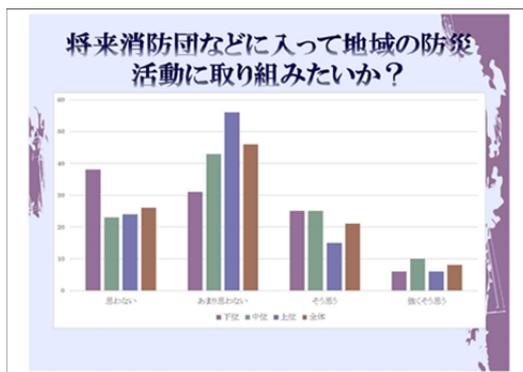
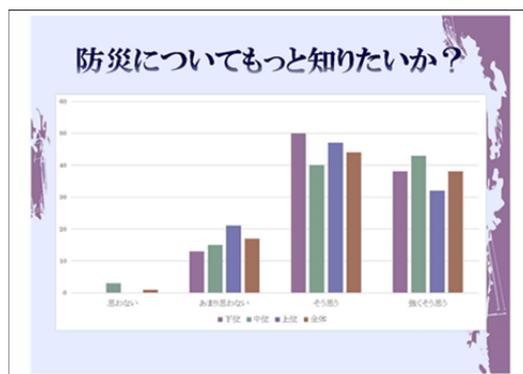
す。教科別に見ますと、国語、数学、英語でその傾向が顕著に表れていて、国語と数学でおよそ3ポイント、英語では4ポイント上昇しています。更に、各年度の入学生を学年別に追跡したグラフを作ってみると、1年生から2年生では変化がなくて、3年生になると上昇するという共通点が見られます。

さて、ここまで『計測可能な学力』だけを特化してお話してきましたけども、『数値化できない学力』というものも当然あるわけで、私たち教員は、むしろそちらのほうを重要視しているようなところもあります。実は、A中学校では2013年以降、作文や絵画など、『考え、判断し、

表現する』という能力を必要とする分野が飛躍的に向上してきました。校内の到達度評価、いわゆる通知表の成績で、5段階中2に該当する生徒が校内にいません。また、人権作文や明るい社会をつくる作文、税の作文等で、県レベルでの優秀作品に連続して入賞するようになっています。絵画でも内閣総理大臣賞を受賞する等、表彰が相次ぎました。県の防災ポスターコンクールがあるんですが、入賞者のうち、特選を含め7割を超える生徒をA中学校が占めました。これは、まさに防災教育が始まってからの成果であります。

このように防災教育の進展と共に学力が上昇した生徒は、防災教育をどのように捉えているのかということ調べてみました。調べる前に、おそらく学力の高・中・低にあわせて結果が変わるんじゃないかという仮説をたてました。そのため、NRTを基に生徒の学力の上中下の3段階に分けてあります。

最初に、防災教育の重要性をどのように認識しているかを確認するために、『防災学習は大切だと思いますか』と質問しました。その結果、80%以上の生徒が重要性を強く認識し、大切ではないという生徒は0%でした。次に『防災学習は役に立つか』という問いでは、やはり80%以上の生徒が強く役立つと認識していて、否定的な生徒は2%でした。更に、防災学習への関心意欲を確認するために、『もっと防災について知りたいか』と問いました。関心があると答えた生徒は82%、ない生徒は18%という結果になりました。学習の成果を計る指標はたくさんあるんですけど、『心の奥深くまで学習目的が浸透している』というのは、『学びで生まれた思考を行動に移せる』ということだと私自身は考えています。そこで、『将来、消防団等に入って地域の防災活動に取り組みたいか』と問いました。結果を見ると、取り組みたいと回答した生徒は30%でした。数値は低いように見えますけども、このA中学校が立地している自治体の消防団の加入率が1.2%であることを考えると、この結果



はむしろ高いんじゃないかと考えています。

これらのアンケート結果を学力段階別に見ると、防災学習の意義や意味を感じていかどうか、防災学習への関心や意欲については、学力にあまり関係ないことがわかりました。これは、他の教科学習においては、ほとんど見られない現象だと思います。例えば、社会科が得意な生徒は、社会科に関心があり意欲がある。社会科が苦手な生徒は、社会科に対する関心や意欲が低いというのが一般的だと考えますが、どうやら防災教育については、そういった傾向が見られないということがわかります。むしろ学力の高位層や下位層よりも、中位層が防災学習に対しての関心があり、今後活動をしたいというような意欲も強いということも若干わかってきます。

最後になりますが、今日のお話は研究の半ばで、こういった場で発表するのはちょっと躊躇しました。とりあえず中間報告みたいな形でご報告させてもらいました。そのため、研究の半ばで言えることは、「少なくとも『防災教育をすれば学力上がりますよ』というような単純なこ

とではない」ということだと思います。例えば防災教育のカリキュラムをどういう構成にするか。子どもの学びの過程をどうするか。それに指導する教職員の協同性をどういうふうに構築するか。生徒の主体性をどう担保するか。おそらくこれ以外にもまだあるんじゃないかなと思います。『そういった要素が、防災教育を通じて学力の押し上げ要因になっている可能性がある』とこの場ではお伝えしたいと思います。こういったことについては、今後専門家の方や研究者の方にご協力を頂いて、更に研究をつめていきまして、これらの関連性を考えていきたいと思っています。

畦地：先生方にとって、学力は最も関心が高いことですよね。五十嵐先生がおっしゃったように、『防災教育をやれば、イコール学力が上がるんだ』という単純なものではない」とは思いますがけれども、その可能性があることに関しては非常に興味深い内容ではなかったかと思います。

続きまして、林先生、お願いします。

林：林宣行です。和歌山県の串本町の古座小学校に勤めています。実家が、古座小学校から30分程的那智勝浦というところ。那智勝浦は非常にいいところで、4つの日本一のものを持っています。

一つは、落差133メートルの那智の滝です。那智の滝の那智の原生林は40から50。雨が降った時は、もうちょっと増えると言われているんですけどね、たくさんの滝があります。この滝では滝行もできます。修行される方も多いです。そのうえ、那智高原という昔、天皇陛下が植樹祭にも来たことがある場所があって、133メートルの滝にちなんで、133メートルのスライダーがあります。300円くらいでマット借りれば滑り放題です。

次は、海の日本一です。はえ縄漁による生マグロの水揚げが日本一です。勝浦にはマグロの食べられる店が30軒あります。私の家では、



林 宣行（串本町立古座小学校）

一週間マグロを食べないなんてことはありません。大体二日に一回はマグロが出てきます。とっても美味しいです。

次に川の日本一。13.5メートルのぶつぶつ川は、日本で一番短い登録河川です。

最後は、山の日本一。遠くに霞んでいるのが富士山なんですけども、富士山が見える最遠の地、日本で一番遠いところから富士山が見える場所が勝浦になります。

勝浦はとってもいいところです。これを、子どもたちに教えて欲しいんですね。『自分の地域に誇りを持って、好きになる教育』は、立派な防災教育で、とっても大事なことだと思います。

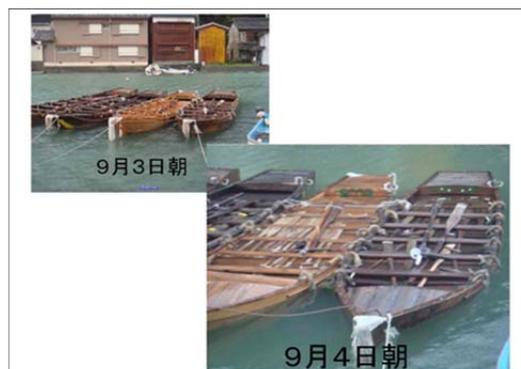
毎年9月に勝浦のお祭りがあります。今年は18日です。私は10年くらい中学生に祭りの指導をしているんですけども、今頃、私の所属している青年会のメンバーが船を下して祭りの準備をしていると思います。明日から練習が始まります。地域に残る伝統や文化を子どもたちに伝えて、それを守っていくというのも、やっぱ

り大事な防災教育なんですね。

和歌山県出身の先生方からお話ができていましたが、2011年9月2日に電話が掛かってきまして、「台風が来ているから船を安全なところに移そう」ということで、みんなで船を移しました。次の日の朝見に行ったら、結構雨が降っていたんですけど、こういうような状態でした。そして、その次の日がスコールのような大雨で、9月4日に行ったら、雨が船の中に入って、船がほとんど沈んでいるような状態でした。見比べてもらえると、凄い量の雨が降ったんだなというのがわかると思います。

この後、昔からの習慣で、海を見に行っただけですけど、9月3日の朝と9月4日の朝で、海の色が違うのがわかると思います。9月4日に紀伊半島大水害が起きました。この後、道を走って行ったら、JRの鉄橋が落ちていて、その先の道は通れない状況でした。これはちょっとただごとじゃないなと状態で家へ帰って、その後、大変なことになっているというのがわかりました。私の同級生も一家五人流されて亡くなっていますし、先輩の中学生の息子さんも流されて亡くなっています。

これまで、この推進連絡協議会でいろんなことを学んできました。私は第1回からずっとノートを取り続けています。第1回、第2回、第3回のノート。先生方が発表した内容だとか、心に残ったことをメモに取っているんです。その中で、「子どもが命を守るために逃げることは、もちろんとても大事なんですけども、それで自分の住んでいるところを嫌いにならずに、自分の住んでいる地域に誇りを持って好きになる」ような教育を併せてやっていくことが、一番大事なんじゃないかなと思っています。



(2) 防災教育の効果



畦地：皆さんからそれぞれ非常に興味深いお話を聞かせて頂きました。その中でも、教育関係者の集まりなので、子どもたちの変化、教育効果が一番興味関心がある部分ではなかろうかと思うんです。皆さんのお話に出てきたのは、防災教育をやることによって子どもたちの『学びに対する意欲』とか『いろんな活動に対する意欲』だとか、あるいは『自己有用感』が高まっている。そして、その結果として、五十嵐先生のところでは、学力も上がるのではないかということとかですね。それから、防災に関しては、興味に関して学力レベルの差がないというお話もありましたよね。それは、どうしてでしょう。私は教員ではなく、一般行政職員なので、あまり教育に明るくないので、「なぜ防災教育はそのように子どもたちの意欲を高めることができるのか」という点について、何か思ってます先生、いらっしやいませんか。

嶋口：先ほど五十嵐先生から「学力が上がった」ことについて、「何らかの要素が学力を上げ、底上げとなったのではないか」とお話があったと思います。田辺市では1学期に手引きを使った授業をやって、その成果と課題を先生方にまとめてもらったんです。それで、成果がたくさん出

てきたんですけども、特に「特別支援学級の生徒にとって、非常にわかりやすい内容だった」と、複数のグループから出てきたんです。

昨日の宮川先生の発表にもあったように、単元の最初に、学習の過程を提示するなど、今は授業のユニバーサルデザインが指摘されていますが、『防災の授業』という視点で切り取った時に、イラストであるとか写真であるとか、視覚的に提示することが、わかりやすさにつながっているのではないかと。

それから、『学力の3要素』として、『学習意欲』、『基礎的・基本的な知識の習得』、『思考力・判断力・表現力の育成』があると思うんですけど、3つが非常にクロスしていると思うんですね。例えば、田辺市の場合、手引きだと、「大雨が降ったときの危険について知る」。これが『知識の習得』だと思うんです。次に、クロスロードを用いて、「災害の対応について、自らの問題として考え、様々な価値観を共有する」。これは、『思考・判断・表現』だと思うんです。また、沿岸部の指導案の中には、「故郷を生き、自分たちの手で守っていかこうとする心情を育む」とあります。これは、『意欲』だと思うんです。そういう国が示している3つの学力と防災教育は、非常に合っているのかなと思います。

森本：今のお話も伺っていて、自分も釜石東中学校で、防災教育を学年でもやり、教科教育でもやり、全校でもやりました。子どものふり返りを聞いていると、子どもたちに「結びつく」と言われます。例えば、「知識として習ったことが、訓練の中で結びつく」ということです。だから、学習が本当にくるくる連鎖をしていく。先ほどおっしゃっていた『思考力・判断力』につながる。「やっぱり大事なものは、自分たちで考える学習が大事なんだ」ということは、多くの生徒から出てきます。『考えることの重要性』が、彼らの口から出てくるんです。

だから、私も『学力』より『どういう力が身に付いたのか』を整理したいと思っています。おそらく、子どもたちが『すっかり忘れている学習』、『これは忘れてもいいんじゃないかという学習』と、『これは大事だったという学習』、『避難の時に本当に活きた学習』と思っているものと、実際に教師がそれをどういう形態で教えていたのかは、結びつくのではないかと思います。子どもたちが『主体的に学んだり、体験したり、考えた』ことは残ってくるし、『実際の避難の時に生きてきた』のではないかと。

そして、もう一つは、命に関わることなので、彼らにとっても切実な課題です。この課題に対して、自分自身はどうするのか。家族のこととか地域のことも考えて、総合的な学習をやっていくと、課題に対する意識が高くなります。そうすると、その分、学びが深くなるのではないかと。総合的な学習の時間を充実させている学校と学力の相関関係は、文科省から出ていますが、同様の相関が見られるのではないかと思います。

畦地：『学んだこと』が、『自分のこととして結びつく』『社会、生活に結びつく』ということですね。

森本：子どもたちの中で、知識レベルでそれが避難行動にも結びつきますし、『学校で習ったこと』と『家庭でのこと』も結びつく。例えば、靴を揃えることは、家庭でも同じようなことを言わ

れるわけですね。『学校でやったこと』と『家庭でやったこと』が結びついたり、『地域の活動』が結びついたりする。防災は総合学習であり、総合科学ですから、いろんなところに結びついていくという実感はあります。

畦地：『自ら考える』ということに関して、非常に防災教育が有効だということは、防災教育を一生懸命やられるとわかってくるんだと思うんですが、それを教科の学習にどうやって活かせばいいのでしょうか。

五十嵐：結論から言うと、まだよくわかってないんですけども、防災教育は中学校においては非常に珍しい教育で、全職員が関わられるんですね。中学校は教科担当がそれぞれ分かれますので、教科の話し合いというのは基本的には教科部が行いますし、学年の話し合いは学年の職員が話し合う。全体で研修するといっても、例えば保健の先生などはあまり関わらないことがあります。ところが、防災教育というのは、全員が関わられるんです。先日、子どもたちが非常食について提案したんですけど、学校栄養士が一番張り切っていました。「そんな栄養の偏りのある料理は駄目だ」と子どもたちの提案をばっさり切っていたりしました。また、もっとびっくりしたのは、事務さんの研修会で防災教育のオフ会があったと言うんです。事務職員も興味を持っているということになると、本当に全ての職員が何らかの形で関わられるということになります。ですから、いろんな職員が、防災教育の授業をやるときにいろんな意見を出すことができる。その中に、もしかするともの凄い研修が校内で行われているのかもしれない。それによって、教員の指導技術が上がっているのかもしれないと考えています。

畦地：今『チーム学校』と言われていました。「チームとして学校を運営していきましょう」と。まさしく、今おっしゃられたのは、防災教育は『チ

ーム学校』を作るための有効な手段なのかなと思いました。防災というのは、イデオロギーとか、あまり思想が入ってこないんですね。だから、学校教育だけでなく、地域でやる時にも、全員を同じ方向に向けさせることができる。

学校教育でいうと、〇〇教育とかいろんなものがあるって、例えば人権教育なんかになると、本当に考え方の違いで背中合わせに座っているような部分がある。でも、防災教育に関しては、同じ方向に向かわざるを得ない。だから、チームとして動くツールとして、防災教育はいいものかなと、学校の現状を見ながら思っているわけです。

そういう意味では、生徒も含めて、非常に良いチームをつくって、取り組んでこられた大句先生、何か思うところはございますか。

大句：先生が子どもに「教える」という気持ちでいると、「何か教えてあげなければいけない」と思い、二の足を踏むんですが、生徒も先生も同じに考える。「今度訓練するとき、どういうふうにしたらより現実的であろうか」ということを一緒に考える。町内の地形を知っている先生と、その町内に住む子どもたちで、次の避難訓練をどうしようかと考える。どこにどんな人が住んでいるのかを子どもたちは知っているのだから、「あの方は、手を引いて一緒に避難してあげないといけないんじゃないか」と一緒に考えることで、より具体的に考えることができます。

私は、昨年度の黒潮町で開催された連絡協議会に、「自分も退職するし、どう今後につなげたらいいんだろう」という課題を持って参加しました。今思っているのは、『つながり』は私から押し付けるものではない」ということです。小木で一緒に学んできたり、一緒に行動してきたりした先生・職員が、他の学校に異動することによって、次の学校でもまた取り組む。ここにも多分いらっしやると思うんですが、異動先の学校で取り組みにくいこともあるかもしれないけども、絶対目の前でいいことが、子どもた

ちが生き生きすることが起こると思うんです。例えば、子どもたちの成績が上がっていくなどの効果を目の当たりにしてきたので、防災教育は効果がないものではなく、その効果を実感できることがあるはずですよ。そして、それを実感したからこそ、次の職場でも小木で防災に関わった方が、新しい防災を他の学校、他の地域で広めていく。

今ここに子どもたちが書いた感想があります。「片田先生の講演を聞いた。片田先生は『東北と全く関係のない地域で、小木が防災に力を入れてくれて嬉しい』と言ってくださいました。自分も確かにそうかもしれないと思いました。なぜならば、まだ被災していないので、いろんなことを想定します。同じような取り組みをするのではなく、毎回一つひとつ避難訓練で、『次はこれ、前は失敗したから次は改善しよう』などと、訓練を行うほどに小木の防災はより良いものになっています。」と。ここからちょっと話は大きくなるんですが、「人間は遙か昔から生きる工夫をして生活をしてきたように、小木の防災も小木の住民を津波から守るために工夫を重ねているのです。普通は回数を重ねる度に気が緩み、やれるだけやればいいたいだろうと思ってしまう訓練も、私たちは常に良い方向に進化させるために、次々に改善していっています。」と書いてくれています。この子は、今高校生ですが、「今年度は、参加者を過去最大にしたいと思い、僕も参加します」と書いてくれています。

自主防災の会長は、中学生、中学校がやろうとしていることを全面的にバックアップしてくれる。どんなアンケートでも取ってもいいし、チラシをまいてもいい。毎月15日に「今日は小木地区防災の日です」と、朝8時に放送も流しています。テーマはその月によって違うんですけども、

『チーム学校』は教職員だけでなく、先生の立場とか子どもの立場とか超えて、また学校だけでなく、地域も含めてできているのではないと思います。

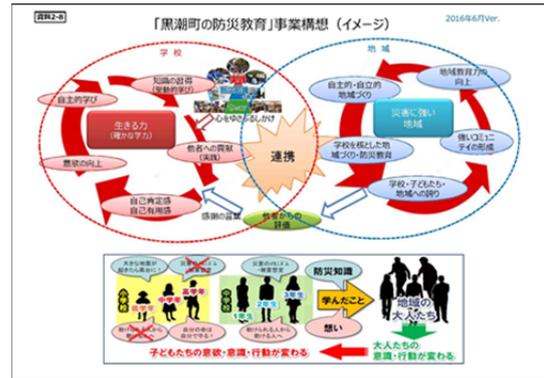
畦地：子どもたちが、学校の中だけで学ぶという行為だけではなくて、地域に出て行き、地域と協働することによって、地域がどんどん変わっていくというお話もしていただきました。

先ほど林先生から、『故郷を好きになる教育』、『防災教育で故郷を好きになる教育をしなければならぬんだ』というお話がありました。地域に子どもたちが出て行って、防災教育をすることによって、目に見えて大きな変化があったのではないですか。

林：今の私の学校でも、地域に出ていくことはもちろんあるんですけども、残念ながら防災教育としてはまだできてないです。

今の勤務校では、例えば、警察の方に来てもらって交通安全教室をやったりとか、地域の方に来てもらって踊りを教えてもらい、それを演芸会で発表したりとか、子どもたちが七夕の飾りつけをしたものを、地域の祭りで使う船に付けて出たりとかしています。地域の方は、子どもが行くと凄く喜ぶます。変化については、まだわからないんですけども、こういう活動はもの凄く大事だと思っています。

現状でも、外部ティーチャーを呼んだり、いろんな行事がある。そんななかで、私が一教師の立場で、さらに防災教育で新しいことをやるには抵抗が大きい。なので、今ある中で、地域の方に関わってもらうことをちょっとずつ増やしながら、また子どもたちが地域を好きになるような仕掛けをつくってやっていく。例えば、地域の祭りに参加したら、1ポイント付くとか。そういう形で年間を通して、いろんな行事にポイントを付けて、「〇点取ったら〇級」というように、最終的にボランティアライセンスというか免許を取得できるようにする。これによって、地域のボランティアだとか祭りなどにどんどん参加していけるような子にしていきたいなと思っています。



畦地：これは冒頭に金井先生が、「知識の防災教育から、心を揺さぶる防災教育をすることによって、子どもたちの自己肯定感などが高まる」ことを説明された図を参考にしたものです。

知識の防災教育に心を揺さぶる仕掛けをすることによって、子どもたちによる他者への貢献を実践しましょう。まさしく先ほどのボランティアなどです。そうすると、地域の人から子どもたちは感謝をされる。他者からの評価を受けるわけです。そのことが自己有用感、自己肯定感を高め、意欲を向上し自ら学ぼうとする。それが好循環を生むことによって、子どもたちの学力が上がる。

ここまでは、金井先生が先ほどご説明してくれたことと全く一緒です。私たちは、地域と連携をすることによって、地域も変わっていくのではないかと考えているわけです。つまり、学校を核とした地域づくり、防災教育をすることによって、大人たちが子どもたちを評価するわけです。自分たちの小学校、中学校を凄く誇りに思うし、自分たちの地域の子どもに対する誇りが生まれる。そうすると、地域の結束力が高まり、強いコミュニティになる。それによって、さらに地域の教育力も上がるのではないのか。こうなると、『災害に強い地域づくり』は行政任せにせずに、そこに住んでいる者たちが自らで地域づくりをしていこうとなって、さらに地域自体が災害に強い地域になっていく。

学校の赤いループと、地域の青いループがお互い共鳴し合い、無限大(∞)を描きながら、

地域づくりをしていくことが、今我々黒潮町が防災教育を進める時のイメージです。

34 メートルの想定を受けた私たちの町は、保母さんや調理師さんも入れて、職員が200人くらいいます。その職員全員を町内全64集落に、担当職員として割り振っている。その集落に入っていくって、啓発活動とかもするんですけど、やはり役場の職員が行っても限界があるんです。言うこと聞いてもらえないんです。ところが、昨年、片田先生にも来て頂いて、地区防災計画シンポジウムをやった時に、某小学校の6年生が発表したんです。それを聞いた大人が非常に感動したんです。そこにいた町長も、「やっぱり子どもの力は凄い」と。役場の職員が100回言うよりも、子どもが一言言うほうがよっぽど教育効果が高いということです。今年は、子どもたちが、地域の先生役になれないかということで、片田先生にもご指導頂きながら進めているところなんです。

その発表した6年生の子たちは、小学校1年生の時には、その学校始まって以来の大変な学年だと言われていました。それが、防災教育をやることによって、1年生の時からあの子どもたちを知っている人たちがびっくりするぐらい、子どもたちが成長した。それぐらい防災教育をやって子どもたちも変わったということなんです。

今後は、学校だけで連携するのではなくて、どうやって地域と連携をしていくかが重要なテーマになってくると思っているのですが、どうでしょうか。

森本：釜石東中学校で最初に学年レベルで防災教育を始めた時に、教育委員会の方だけでなく、一番大きかったのは、市の消防防災課に協力してもらえたことです。片田先生が講演をしたり、ワーキンググループの会議には、必ず市の防災課の方がいらっしやっていたんです。それで、「何かあれば私に」と言ってくれていました。それで、私は学校の防災教育担当者なので、

市役所にしょっちゅう電話をするわけです。地域に出て行きたいときや、防災ボランティアを展開するときなどに、「子どもたちのアイデアがこうで、先生方のアイデアがこうなんだけど、これを実現するためにはどうしたらいいでしょう」と。そうすると、消防防災課の方が、「今、自主防災組織を立ち上げているから、そこと連携したらどうか」とか、「この地区であれば、この方が核になるから、連絡してみよう」とかアドバイスしてくる。また、「これは消防防災課ではなく、福祉課を紹介するよ」とか、「こっちは日赤でここに行けばいいから」とか市役所内でもつながりが広がるわけです。

その次の段階になってくると、子どもたちがアンケートを1,000軒に配布しようなんて計画をたてた時には、地域毎に地域の方々が集まって協力してくれるわけです。そして、先生方も、細かいこと言わずに、「じゃあ、うちの地区は僕がやります」とか言ってくれるようになる。

私の場合は、地域との突破口になってくれたのは市役所で、そこを介して、地域の核になる方々とつながり、その方々と学校がいろいろやっていくことで、いろんな展開ができたなと思いました。

子どもたちは「自分たちがやった」、「生徒主体の活動だ」と思っていますが、その子どもたちからも、「自分たちから地域の方々に関わっていったのが、非常に大きかった」と言っています。それまで、こういう機会がなければ、中学生は思春期ということもあり、どう関わっていかわからなかった。それが「地域の防災のために」とアンケートを配るわけです。いろんな活動をするわけです。それによって、地域の人に声を掛けることができた。そうすると、また次の機会にも声をかけられる。「自分から関わることができる学習で良かった」という言い方をしていましたが、こういった相乗効果が生まれつつあったのが、震災前の釜石東中学校だったかなと思っています。

(3) 防災教育を通じて果たしたい願い

畦地：いろいろご発言頂きましたけれども、最後に『これから』について、皆さんからそれぞれご発言頂きたいと思っております。皆さんには事前に、『防災教育を通じて果たしたい願い』を語って頂くことをお願いしております。いろんな果たしたい願いがあるかと思います。林先生からお願いします。

林：昨日も授業の話をしましたが、防災を学ぶことを通じて、『地域を好き』になったり、自分が『日本人であることに誇りを持つ』、そういう心を育てることを、僕は凄く大事にしているんです。そんな思いで、新宮市にいた時に実際にやっていた授業で、最後に子どもたちに話す内容を紹介します。

「上は関東大震災直後の東京の写真です。下は現在の東京です。同様に、上が阪神淡路大震災、下が現在の神戸の街です。新宮市は、南海地震のときは津波じゃなかった。火事で町の70%が消失しています。今の新宮市が下です。東京大空襲、大阪大空襲の東京と大阪、現在の東京と大阪です。これは台風12号の新宮市ですね。みんなも知っている通り、新宮市も着々と復興して前よりも綺麗な姿になっています。」

「日本人は、地震や津波、台風、洪水、戦争、いろんな苦しいことを乗り越えてきた。日本人は、諦めない強い心と強い精神力と、みんなで協力して助け合う心を持っている。だから、もしここに地震・津波が来ても、生きてさえいれば、必ずよりいいものを作り出すことができる。だから、絶対に生きてのびなきゃ駄目なんだよ。」

授業をやった後、子ども達に必ず感想を書かせています。「地震津波は怖いけれども、日本人の素晴らしさがわかった」とか、「私たちも頑張って命をつなげて復興させたい」というような感想を書いてくれます。



世界で一番優秀だと言われているユダヤ民族。0.2%の人口でノーベル賞の20%をユダヤ系の人が取っていると言われています。その勤勉さと頭脳で、ナチスに嫌われて迫害されたという歴史もあります。ユダヤの人たちは、子どもたちに何を残すか。財産、土地、お金などは取られたほうがいいんだ。一番大事にするのが教育だそうです。教育は命を取られない限り、誰にも取られることがない。ユダヤの帝王学の中に、子どもの時にユダヤ人が必ず子どもに言うことがあるんです。それは、自分のアイデンティティーを高めること。「あなたのおじいちゃんは立派な人なんだ。こんなことをした人なんだよ。あなたのお父さんは、あなたのために一生懸命働いてくれる素晴らしい人なんだよ。」ということユダヤ人は、子どもが小さい頃に徹底的に教えるんですね。だからアイデンティティーが高い。「俺にもそういう立派な血が流れている」と思える。

日本人ってなんか嫌味です。「あなたのお父さんは素晴らしいのよ」なんて言ったら、何か馬鹿な感じがしますよね。でも、本当はとても大事なことだと思うんですよ。例えば、私がビール飲んで、だらしなくテレビ見ていたとしても、嫁さんは、子どもに「お父さんみたいにならないでね」なんて絶対言っちゃ駄目なんです。でも、結構言ってるんですよ。学校でこの話したら、「うちの親そう言っている」という子どもが結構います。子どもが、奥さんにガミガミ怒られている時に、子どもに「あんな女と結婚するなよ」っていうのも、結構言ってます。けど、これは絶対駄目なんです。じゃあどう言うか。「お父さんは今こういうだらしない恰好をしているけども、外に出たら家族のために、あなたのために一生懸命働いてくれてるんだ。お父さん素晴らしい人なんだ。」とお母さんがガミガミ怒っていたら、「お母さんの愛は凄く深い。愛情の深い女なんだ。あなたもそういう嫁さんをもらうんだ。」って言わなきゃいけない。

防災と全く関係ないような感じですけど、防

災教育で育みたいのは、自分で判断して自分で行動するという『自主性』なんですね。これを達成するためには、防災教育だけじゃなく、全ての教科、全ての子どもとの接し方、指導を根本的に見直してやっていかなきゃいけない。これから、自分もそうやって授業を見直して、子どもの接し方も考えてきたいと思います。

畦地：五十嵐先生、お願いします。

五十嵐：先ほど防災教育の目的を話させていただきました。そこでも少し述べましたが、防災教育をやっていくうえで大前提となるのは、地域への関心、郷土愛というものが必要になると思います。それがないと防災教育は大変な教育になってしまう、そんなふうに思います。その郷土愛を身に付けた子どもたちが次に考えるのは、「地域に対して、自分は何ができるんだろう」と、地域貢献を考えるようになっていきます。さらに、「自分も将来この地域を背負って立つ人間になろう」、「コミュニティを引っ張っていこう」というように、いわゆるローカル人材が育成されていく。

これまで私たちは、学校教育の中では、そういった地域の人材育成に対して、結果としてそういうところにつながっていたこともあったかもしれませんが、それを主目的に教育はしてこなかった。その結果として、皆さんご存知のように、「ほとんどの地方が今後消えていく」という総務省の発表につながってしまった。実際、新潟県内を歩いていると、本当に高齢者だらけの状況です。そういう状況を見ると、ちょっと背筋が寒くなるような思いがします。このままにして本当にいいのだろうか。子どもをどンドン育てて、そして東京に、どンドン人材供給していく。その繰り返していいのだろうか、と考えています。

防災教育の本流ではないんですけども、防災教育を進めていくなかで、ローカルな人材を育て、やがて将来を担っていく。その子たちは防

災教育をしっかり受けた子たちですから、地域の防災もしっかりやっていく。そういう子どもたちが地域に増えれば増えるほど、確実に地域は変わっていく。先ほど、「地域との連携において地域は変わる」と言いました。もちろんそんなんですけども、防災教育をしっかりやり続ければ、10年後、20年後の地域の変化は、その比ではないと思います。ですから、教育はもちろんのこと、行政も連携して、地域を新たに創造していくことが、今後求められるんじゃないかなと思います。そして、私もそれに則った10年後、20年後を見据えた教育をやっていきたいと思います。

畦地：西本先生、お願いします。

西本：防災教育については、私はやはり『命の教育』が根本にあると思います。『命の教育』は、日常の中から子どもたちが経験あるいは感じてきたことを元に活かされる教育ではないか。「揺れたら逃げる」、「揺れたら身を守る」、「津波が来たら逃げる」、「高い所に逃げる」、こういった日常生活から子どもたちが学んできたことが根本にあって、子どもたちは自分たちの生活をふり返る中で、それらを改めて考えていける題材があるのではないかと考えております。

そんな中で、自分の命はもちろんのこと、他者の命についても考えていく。そして、何よりも思いやりや優しさというものを大切に、地域のコミュニティの再生を考えていかなければいけない。昔は隣近所のおばちゃん、おじちゃんが、気軽に声を掛けてくれました。具合が悪そうだったら、「どうしたの」と声を掛けてくれました。そこには助け合いがあったと思います。やはり地域のコミュニティの再生がない限り、広がりとか、長続きしていく防災教育にはならないんじゃないか。

そして、その防災教育の発端が、子どもたちからの発信でもいいんじゃないか。子どもたちが発信していく。その一つひとつの取り組みが

地域とつながっていく。そして、地域とつながることによって、自分たちの故郷を見つめ、身近にある地域のことを子どもたちが考えていける。そういう防災教育であって欲しいなと自分は思っております。

畦地：松本先生、お願いします。

松本：少し視点が違ってしまいかもしれないんですが、『最近の若い者は』っていう言葉は、古代エジプト時代からあると言われていています。私自身、そう言いたくなる年にもなっています。最近の子どもたちは、いろんな課題はあると思います。家庭環境であったり、経済的に厳しかったりという子どもが圧倒的に増えている。そんな中でも、子どもたちはみんな頑張っています。

一方で教師は、OECDの中で一番日本の教師は多忙で、日本の教育差も最も少ないなど、ネガティブなことも言われています。でも、僕は教師は素晴らしい仕事だとずっと思ってきました。この素晴らしい教師という仕事をしていく中で、子どもたちを育てる中で、自主的にやれる仕事としてやってきた中で、子どもたちにとって明るい未来を伝えるには、どうすればいいかっていうことを真剣に考えられる仕事をしている。そして、それが子どもたちに伝わると、正のスパイラルが綺麗に回っていく。畦地さんが作られた図もそうですけれども、正のスパイラルが綺麗に回っていく。

これはある講演会で聞いたんですけど、「先生方は第二希望ばかり言ってないですか。『学力が上がる』、『部活でいい結果を残す』、『人を思いやる』、『仲間はずれにしない』、『いじめをしない』。第一希望は何ですか。やはり命なんじゃないですか」と言われました。その通りだと思います。真剣に考えていきたいと思います。

明るい未来を作るために、私たちのやっている仕事、それを子どもたちに伝えることを一生懸命やっていきたい。そのためには、教員が元気でなければいけない。元気いるためにはどう

すればいいのか。行政のやること、管理職のやることあるんだと思います。

畦地：嶮口先生、お願いします。

嶮口：少し個人的な話になるんですが、21に阪神淡が起きました。その時私は6生の担任をしていましたが、式の次の日から北淡町に一人でボランティアに行きました。心のケア隊として仮設住宅を回ったんです。いろんなことを言われて、怒られたこともあったんですけど、そこで非常に印象的なことがありました。ある仮設住宅をノックしますと、中から一人のおじいさんが出て来られた。非常に高齢に見えたので、「お一人ですか」と言ったら、「一人で住んでるよ」と。その時点で、私は「可哀想に」という思いになって、「大丈夫ですか」と言ったんです。そうしたら、その方は94歳だったんですが、「こんなもんで、わしは負けない」と。「関東大震災、第二次世界大戦、そして今回の震災。この3つをわしは通り抜けて来たから、これからも生き抜く」という話をされました。僕の防災のイメージというか、印象はそこなんです。

少し関係ない話をしましたが、今の子どもを取り巻く状況を考えてみますと、一言で言うと『母性に包まれている』と思うんです。個別の配慮をされて、「辛いことはなかったですか」というアンケートを取られて、あったら詳しく話を聞いてもらえる。そういうことも大事だとは思いますが、もちろんなかったら駄目だと思うんですけど、その逆の『父性』といいますか、先ほどのおじいさんの話じゃないですけど、「何が何でも生き抜くんだ」という強い心を育てる、折れない心を育てることが減っているように思います。

では、それをどうしたらその力が育つかと考えたときに、僕は防災教育だと思うんです。防災教育というのは、『父性の教育』であって、子どもに強いリアリティを持たせて、人間として厳しい判断を迫る教育だと思います。本当に

これからの学校教育にとって、非常に大事だと思っています。これからもこの教育を続けていきたいなと思います。

畦地：大句先生、お願いします。

大句：小木中学校の防災教育を始めた時の目標に、『防災を小木中の伝統に』ということがありました。また、自分は『防災は日常である』と考え、子どもたちが今まで経験したり、体験したり、または知識として得た中から、「今この時、自分の命をどう守るか」を考えられる人間になって欲しいと思います。

これまでの活動を通して、自分が行動することで、周りの人に伝えることで、周りの人のお話を聞くことで、たくさんの人とつながってきました。活動は何もかもうまくいくわけでもなく、試行錯誤を繰り返していますが、『人と人がつながる』ことから得た喜びとか達成感、自己有用感になったり、自己肯定感になったりしているのは事実です。これからの子どもたちにも、そういう体験が自分自身の生き方を支えるものになるんだと実感してもらい、大人になっていって欲しいなと思っています。

畦地：森本先生、よろしくお願いします。

森本：自分自身が今思っていることをいくつかお話させていただきます。

今、釜石東中学で被災を経験した当時の子どもたちから、もう一回学び直しているところですが、これをもっともっと役に立てていく必要があるんじゃないかと思っています。今日のような協議会だったり、未災地、被災地という空間的な広がりもあると思います。片田先生がよくおっしゃっていた『次の世代』、『文化形成』にどう持っていくか。『未災地と被災地』という言葉聞いた時に、『被災世代』と『被災を経験していない次の世代』とをどうつないでいくかを考えました。縦と横のつながりを常に考えて

いくなか、今は県の担当者として横につながようとしていて、それがなかなかうまくいっていない。では、縦にどうつないでいくかということも大きな課題だなと思っています。

その時に、学校教育を核にしていくためには、先生方への研修や教員養成をどうしていくかが大きな鍵になる。せつかく学校の安全が必修化になるので、これを充実させていくのは一つの手だろう。じゃあ何を大学の教員養成のカリキュラムでやればいいのか。その原点は、子どもたちから学ぶべきじゃいか。だから、今子どもたちから、「どういう学習が大事なのか」を学んで、その知見を、大学という立場から、教員養成のカリキュラムにどう活かしていけるのかを考えていきたいと思っています。

もう一つ、防災教育を学校教育の俎上に乗せていく時に、自分がずっと震災後から引っかかっていたことに、『評価をどうするか』というところがある。防災教育としての評価です。各教科領域では、それぞれの評価はある。防災教育を通じて、子どもたちにどんな力が身に付いたのかを、『災害が起きたときの結果』で最初に評価するのは駄目なんじゃないか。その前の評価が必要なんです。災害が起きる前にも、「子どもたちにこんな力が身に付いた」という目安みたいなものだったり、指標があったほうがいいんじゃないのか。今、子どもたちから聞き取っているところから、そういった目安や指標が整理できるんじゃないかと思っています。

そういうものを整理して、縦の時間軸上のつながりと、横の空間的な広がりとを展開していく。そのためには、総合的な戦略が必要だと思うんですが、今、自分は教育学部にいるので、学校教育の立場で考えていければと思っています。

子どもたちへの聞き取りの中で、『生き方』、『キャリア』についても聞いています。例えば、「僕は故郷に戻れないかもしれない。実はずっと農業に興味があった。おじいちゃんの畑や田んぼは今回大きく被災してしまい、鶴住居から

も離れてしまっている。でも、やっぱり農業に関わりたい。将来は、国の農業政策に関わっていきたい。そのために、勉強して、農林水産省みたいなのところにも入りたい。この災害を経験したので、大きな災害があった時に、農業をどう復興・再生すればいいのか、そういう視点を持ちたい。」という子どもがいます。

また、ある子は美容師になるために今専門学校に行っている。「私はずっと美容師になりたかったんです。震災とは関係なく、なりたかったんです。防災の学習をしたり、震災を経験したりして、今の夢は鶴住居で美容室を開くことなんです。そうすれば、防災とは直接関係ないかもしれませんが、そこが地域の方々が気軽に集まってくれる場所になるんじゃないか。」と言っています。その子は被災した後の大変な時にボランティアの方にカットしてもらって、美容師として関わることがあることを知った。何より、私の心を打ったのは、まだ19歳の子どもが、「地元に戻って、そこで地域の人たちが集まれる場所を作りたい」と、『地域』のことを考えてくれていることでした。

「看護師さんになりたい。それは震災前からそうだったけど、震災で強くそう思うようになった。あの時に駆けつけてくれた看護師さんたちの姿を見て、私も災害時にこういうふうになりたい。そして、できれば地域に戻り、地域の医療をやりたい。高齢者の方々の地域医療に関わりたい。」という子もいます。こういった子どもたちを育てていくことが非常に大事だし、それを応援していけるような環境が非常に大事なんだということを、改めて子どもたちから学んでいるということです。

将来、その子どもたちが、それぞれの場所で、そういった生き方をしていけることが、地方の再生だったり、もしかしたら今後の日本という国の大事な部分になってくるんじゃないかなと思っています。

地域コミュニティの再生というのは、凄く大事な部分だと思っています。故郷を愛するもの、

非常に大事です。この点については、片田先生は震災前から釜石でおっしゃって頂いていました。震災前、釜石には、東京大学の玄田先生という、「釜石の希望をどうつないでいくか」といった『希望学』を研究されている先生がいらしていました。その先生の話と片田先生の話がピンとつながったことがあるんです。それは、地域再生の一つの鍵は、『緩やかなつながり』ということなんです。『安否札』を配布する時に、「これは緩やかなつながりを起こせるんじゃないか」と思ったんです。緩やかなつながりで、地域がつながっていく。そこにコミュニティの再生がある。子どもが安否札を配った時に、もらった人は、まだもらってない人に、「中学生がこんなことしてくれた」と話をする。またきっかけを得た子どもたちは、地域の人に挨拶するようになる。言われていた通り、緩やかなつながりが広がっていった。

今、首都直下や南海トラフなどの発生が危惧されています。明治三陸の余震として昭和三陸があったんじゃないかという説もあるのに、岩手県では、「大きなのが来たからもうしばらくは大丈夫じゃないか」という雰囲気があります。歴史的に見ると、今の子どもたちが生きている間に、必ず次がある。今回だって、「昭和三陸も経験しました。十勝沖も経験をしました。チリ津波も経験しました。そして、今回東日本大震災経験しました」という方がいっぱいいらっしゃるんです。だから、岩手も、防災教育をすることは使命なんだということを、もう一度肝に銘じて、やっつけていかなければいけないと改めて感じさせて頂きました。

畦地：森本先生からは『地方再生』、五十嵐先生からは『地域貢献するローカル人材の育成』というお話がありました。

「兎追いしかの山」の『ふるさと』という唱歌があります。あの3番の歌詞を知っている方は思い出してもらいたいのですが、あの歌では「志を果たして故郷に帰る」んですね。この歌

のように、うちの町からいろんな所へ出て行ってもいい。世界に出て行ってもいい。けれども、「いつかは故郷に志を果たすために、地域に貢献するために、故郷に帰るんだという子どもを作る」ということを、自分たちは目標にしていきたいなと思っているんですね。故郷から出て行く子どもに「ここに残れ」とは当然言えないわけですが、どこに住んでも、どの地で生活しても、常に故郷を心に思っていてほしい。そう思うこと自体が、貢献だと僕は思うんですね。『故郷を思って生きていく』、こういう心を子どもたちには育てたいなと思っています。まさしく皆さんのおっしゃられた『故郷愛』などにつながる話だと思いながら聞いていたわけでございます。

そろそろ時間になりますので、まとめにはいたりたいと思います。

本日は、これまでの『知識の防災教育』を超えて、教育の本質に迫る防災教育の様々な可能性について、各地で取り組まれている皆さんからご報告を頂きました。いろんなキーワードが出てきました。そして、最後には『果たしたい願い』についてお話を伺いました。皆さんはそれぞれどのようにお聞きになられたのでしょうか。ここで、いろんなキーワードが出たんですけども、皆さんのお話からもありましたように、何をどう言おうと、防災教育の最大の使命は、『命の教育』です。目の前にいる子どもたちが自然災害で命を失わないために、私たちは教育しているということです。こう考えると、「うちの学校には他に優先すべきことがあります」という理屈は立たないですよ。先ほど、松本先生から「第一希望は何ですか」というお話がありました。一生懸命に第二希望ばかりやっているんじゃないかと、第一希望である『命を守ること』をやらなくちゃいけない。まさしく、その通りではないかと思うわけですね。

最後に、黒潮町のPRも兼ねてお話をさせて頂ければと思います。今年の11月25、26日の両日にわたって、黒潮町で、『世界津波の日 高

校生サミット in 黒潮』という国際会議を開催することになっております。世界 29 か国から 250 人の生徒が参加してくれます。日本からは全国の約 70 校から 110 人が参加します。

これに関して、今月 8 日、東京都内で主催者である高知県知事と大西町長とで記者発表をおこないました。その席に、和歌山県の自民党の二階幹事長も列席されました。二階先生は、『世界津波の日』の提唱者であり、この高校生サミットの提案者でもあります。この席で二階先生は、「和歌山県広川町の庄屋だった濱口梧陵は稲わらに火をつけて、村人を高台に導いて大津波から命を救った」という逸話、『稲村の火』の話引用されて、このようにおっしゃられたんです。「梧陵は稲村に火をつけ人の命を救った庄屋というだけでなく、県副知事や初代県会議長、郵政大臣等を務めた大政治家だった。濱口梧陵のように、地震津波に対する知識と行動力を持った人が一人でもいたら、半分の人命は助かる。子どもたちへの教育は、いかなる啓発や訓練にも増して大切だ。今回のサミットは人の命に関わる問題。皆で真剣に取り組み、絶対に成功させ、貴い命を守る挑戦を続けていかなければならない。」と、非常に強い語句でおっしゃられました。

この話を傍で聞いていて、私たちは片田先生にご指導頂きながら、黒潮町の防災教育の基本は、まさしく命の教育にしているわけですが、そのことと今回我々が開催しようとしている高校生サミットの開催意義が、僕の中では重なったんですね。つまり、先ほども言いましたが、防災教育を受けた子どもたちは、若者になり、大人になって、やがて故郷から出て行くかもしれない。いろんな海外に出て行くかもしれない。もしその地で災害が起きたとしても、正しい知見と行動力をその子が持っていれば、自分の命だけではなく、周りの人の命も助けることができる。そういうことを二階先生はおっしゃられたわけです。

そう考えますと、児童生徒への防災教育は、

その子が大きくなった時に、その未来の彼・彼女本人の命だけではなくて、周囲の人の命も左右する、非常に重要な取組なんだということを、私自身自覚したわけです。私たちは子どもの今の命を預かっていると同時に、その子どもの未来の命、そして、その周囲の人たちの命をも預かっているということだと思います。

そういうことを皆さんと確認しながら、今後の防災教育に取り組んでまいりたいと思います。この 3 年間、片田先生に呼び掛けて頂いて、このように全国で防災教育に取り組む仲間がたくさんいるということに、私は本当に感激しています。いろいろな話をしながら、これまで皆さんとお付き合いさせて頂きました。これからも、このつながりが切れないように連絡を取り合いながら、子どもたちの命を守ることは当然として、防災教育を通じて、いろんな効果を生むような実践をやっていきたくと思っています。今後ともよろしくお願ひしたいと思っています。

最後になりますが、本日のパネルディスカッションに参加をさせて頂きましたパネリストの皆さんに意を込めて、拍手をして、終わりたいと思います。ありがとうございました。

4. 閉会挨拶



片田 敏孝（群馬大学大学院 教授）

どうもありがとうございました。パネルディスカッションのお話を伺いながら、最初の頃の防災教育の議論との違いを実感しております。具体的な防災教育のテクニカルな話なんか一つも出てきません。もちろん、それも重要は話なんです、教育技術という部分だけではなく、防災教育に関わる者としての心のあり様、子どもたちを育むといことはどういうことなのか、指導する者としての心の持ちようのようなことを深く議論できたかなと思います。

昨日の議論の中で、防災教育の効果がいろんなところに及ぶという話があった。道徳教育だとか、人権教育とか、〇〇教育など、いっぱい出てきたわけですけども、全部防災教育の中に含まれているという認識は、みんなでも共有できているように思うんですね。今日の議論にもあったように、防災は「自分の命は自分でちゃんと守れる」ということなんでしょうけども、それができるためには何が必要なのか。もちろん知識も必要。そして、真っ先に逃げるとい思いも必要。そうなんだけど、その裏側にもっと大事なことがあることに我々は気付いているように思います。

釜石でいろんなことをやってきましたが、それでも大震災によって多くの方が亡くなってしまいました。若き消防隊員が、寝たきりのおじいちゃんを助けに飛び込んで行って亡くなっている。ある若者は高台まで駆け上がって来て、じいちゃんの姿を確認できない。すると彼は戻って探しに行き、その

まま帰らぬ人になっている。お母さんは、津波が来るといからこそ懸命に子どもを探して命を落としている。こういう状況を見ると、知識も必要、思いも必要だけど、最後「人は人として逃げられないんだ」といことを凄く痛感するわけです。お母さんが子どもを懸命に探して死んでいく。その人として言わば当たり前の行動によって、被害を拡大している。そういう問題もクリアしていって、初めて防災の実効性があるんだと気付くわけです。

実効性を高くするためには、事前にそういう状況を考えることが必要になる。「親は自分のことをどう思っていてくれるのか」、「その思いに対して自分がどう振る舞うべきなのか」と、『命を守る』という観点から、家庭のこと、地域のこと、弱き子どものこと、そして、「どう生きるか」ということまで含めて、凄く幅広い問題を防災教育は扱う必要がある。その結果として、学力向上などいろんな効果が出てくる。その実感も僕らは今共有しているわけです。何とかこれをものにしていきたくと思っています。でも、『防災教育』ともう言いたくないなど、正直思うわけです。『防災教育』のラベルを貼った段階で、一般的なイメージとして『逃げる逃げる教育』に矮小化されてしまい、それが社会的に定着してしまっている。

今日の議論でもわかるように、もちろん、逃げる、命を守ることは、防災教育の一番の根源としてあるんだけど、そこから得られるいろんな副次的な効果が、これほどまで本質的なところに及んでいて、波及していく効果がいっぱいある。それに気付いた時に改めて、日本の教育のあり様に及んで考え抜いていきたいなと思うわけです。そのためにはもうちょっと時間が必要だなと思います。実践も必要。それを報告し合いながら、その先に見えるものを皆で掴みたいなという思いがあります。メンバーを拡充していきながら、組織を維持していき、いろんな議論を重ねて、おぼろげに掴んでいるものをしっかり形にして、先につなげていきたいなと、今日思いを新たにしました。

これまでの議論の中で、実践的な部分について感じ取ったことを追加的にお話させて頂きたいです。

このメンバーの多くは、学校の教師として子どもたちの前に立っておられる。目の前に子どもたちがいますから、「目の前の子どもたちに対する防災教育をどうするか」、そこに当然思考がいくわけなんですけども、狭く考えて頂きたくないなと非常に強く思っています。

先ほど森本先生のお話の中にもありましたが、釜石の子どもたちは、もう間もなくすると、大学卒業して社会に出るような年になるんですよね。あの震災を経て、今子どもたちが何を思っているのか。おそらく震災を経験したからこそ、地域に対する思いやいろんな思いを持ってきている。例えば、美容師になりたいと言っている子も、「地域の皆が集まれるような場所をつくりたい」と地域への思いを持ってきている。あの震災を経験したからこそ、「次の釜石に自分はこう貢献するのか」とか、「前の釜石よりもいい釜石にしたい」というそんな思いが、子どもたちの心の中に満ち溢れているように思っていますよね。

防災教育は、先生方にすれば毎年毎年のルーティンワークでしょう。4月になり、新しい子どもたちが目の前に来ました。一年間、この子どもたちを成長させて、次の学年に送ってやる、次の学校に送ってやる、と考えておられると思うんです。先生方にとってはルーティンワークかもしれないけど、5年、10年と続けていくと、小学校6年生12歳の子が22歳になるように、市民を作っていることになる。

よく行政の方々は、「釜石の将来をどう描くか」、「将来の釜石のビジョンはどうか」なんてことを考えるわけなんですけど、それをやるんだったら、10年後の釜石市民、つまり目の前の子どもたちを見てくれと言いたい、「この子どもたちをどう育むんだ」と。子どもたちを将来のビジョンに見合うように教育していくことを考えたほうが、よっぽど早いんですよね。固定観念の強い大人たちは、防災講演会をやってもきやしない。大人たち相手に一生懸命躍起になるよりも、スポンジのように吸収してくれる子どもたちに、「生きるとは」、「防災とは」、「災皆に向かい合うとは」、「弱者に対する配慮とは」ということをしっかりと10年間教える。それにより、立派

な大人たちを地域に輩出できます。さらに10年頑張ると、彼らはぼちぼちお父さんお母さんとなる。そんなお父さんお母さんが次の世代を育ててくれる。

こう考えると、防災教育を教室座学とコンパクトに考えて頂きたくないんですよね。地域の将来をどう作るか、先生方が毎年やっておられることは、その一部なんです。学校も『育みの環境』の一部ですから。むしろ、地域の大人たちに対して、「学校でこれだけやっても、あなたがそんなんじゃないか、教育効果も出やしないじゃないか」と訴えて頂く。そこまで先生方にして頂くべきかどうか、わかりかねる部分もあるんですけども、行政として非常に大きな仕事だと思います。

黒潮町が非常にうまくいっているのは、町長が思いつき前を見ておられます。町長も率先して、「34.4m、こんな津波に負けるか」、「へこたれてどうするんだ」という思いの中で、「絶対に津波に負けない町にするんだ、犠牲者ゼロにするんだ」という明確な方針を示している。そして、町長の命を受けた教育委員会が、「そんな将来の黒潮町民を作るんだ」と燃えておられる。学校の先生方も教育現場で燃えておられる。黒潮町は34.4mを味方に、皆が将来の黒潮町を見据えていますね。いつかは来るんでしょう。そんな大きいかわからないんですけども、いずれ来ますよ。でも、「黒潮町民は絶対に負けない」、「そんな町民を作っているんだ」という思いの中で、皆が前を向いているわけですね。黒潮町、めちやくちや明るいじゃないですか。

これを見る時に、僕らが先生方に是非お願いしたいのは、防災教育を教室座学と考えると頂きたくないということなんです。継続することで、市民を作り、いずれお父さんお母さんを作り、そして文化を作っていく。そんなことばかりも言っていられない部分もあると思いますけど、「地域を作っているんだ、町を作っているんだ」という、そんな壮大な思いの中で、日々のその教育にあたって頂けるといいなと思います。

これは、地域の将来、町の将来、未来を決定付ける非常に重要な仕事です。町政、市政の核なんじゃないのかと僕には思っています。であるならば、学



校や教育委員会だけにこの仕事を任せるなど。そう考えると、先生方は主に学校という現場におられるわけなんですけども、そこでやっておられる仕事のその意義の大きさ、その意味の大きさ、将来に向けての重要性ということを考える時に、どうか行政を巻き込んで頂きたい。本来であれば今日もここに防災の危機管理の職員や地域戦略部の部長のブレインが半分位いるべきなんだろうと思います。いずれ、僕らはそんな方向まで目指せるといいかなと思っています。そのためにも、今日議論して頂いたことを踏まえて、この先に向けて、皆さんとの共有意識をしっかりと形にして発信し、そして仲間を増やしていく、そんな方向に展開していければなと思っています。

ひとまず今回をもって文部科学省からのご支援を受けたプロジェクトは終了と致しますが、何とか先生方との連携は保ち続け、なおかつ広げていきたい。そして、今度は先生方だけの広がりではなく、できるならば子どもたちの交流が図れるように、このプロジェクト持っていけるといいかなと思っています。それが、大きな教育効果をもたらすということをお察ししておりますので、何とかそんな方向に、このプロジェクトを拡張していけるといいなと思っ

ています。そのためにはいろいろ乗り越えなきゃいけないハードル、準備しなきゃいけないものもあり、話題性も作っていかなきゃいけないんですけども、少なからずもここにおられる方々は、その核になって頂きたい方々ばかりですので、どうかご支援を続けて頂きたい、参加し続けて頂きたい、ここに思いを寄せ続けて頂きたい、思っております。今後の展開については、まだ決まりきってないことがありますので、改めてご連絡することになろうかと思えます。そうなった暁には、また積極的に参加して頂きたいと思っています。

3年間、どうもありがとうございました。この成果は、文部科学省にも報告を致します。そして、自慢しようと思えます。本来ならば5年続けるプロジェクトだったんだけど、3年で当初の目標は十分に達成できたんだと、胸を張って次のステップに向かいたいと思っております。